

阪神地域ビジョン 2050

コ・クリエーション(共創)が育む阪神地域

Hanshin Vision 2050

AMAGASAKI NISHINOMIYA ASHIYA ITAMI TAKARAZUKA KAWANISHI SANDA INAGAWA



2022年3月

阪神新地域ビジョン検討委員会

兵庫県阪神南県民センター・兵庫県阪神北県民局

目 次

| | |
|----------------------------|----|
| 第1章 新たな地域ビジョン策定の経緯・検討 | 2 |
| (1) これまでの阪神地域ビジョンについて | |
| (2) 新たな地域ビジョン策定の経緯 | |
| (3) 阪神地域ビジョン 2050 の検討 | |
| 第2章 社会的潮流 | 4 |
| (1) 人口減少・超高齢化 | |
| (2) 自然の脅威 | |
| (3) テクノロジーの進化 | |
| (4) 世界の成長と一体化 | |
| (5) 経済構造の変容 | |
| (6) 価値観と行動の変化 | |
| 第3章 阪神地域の特性 | 9 |
| (1) 阪神地域の人々の動き | |
| (2) なりたち、自然・文化・歴史遺産 | |
| (3) 寛容性のある風土 | |
| (4) 環境への配慮 | |
| (5) 多彩な産業の集積 | |
| (6) 阪神・淡路大震災の経験を活かした災害への備え | |
| 第4章 地域ビジョンの実現に向けたシナリオ | 17 |
| (1) 地域ビジョンの基本理念 | |
| (2) 地域ビジョンの実現に向けた方向性 | |
| (3) シナリオ | |
| 第5章 地域ビジョンの実現に向けて | 58 |

第1章 新たな地域ビジョン策定の経緯・検討

(1) これまでの阪神地域ビジョンについて

20年前に、参画と協働の理念の下、私たち阪神地域の住民が地域の未来像をビジョンとして導き出したのは「阪神市民文化社会ビジョン-『新しい公』を目指して」でした。

行政のみが「公」を担うといった考えではなく、支え合い、ともに生きるための活動領域を広く「公」ととらえ、多様な主体の参画と協働によって支えるという概念をビジョンに表しました。

阪神地域ビジョンの推進や実現にあたり、県民自らが行き組んでいく実践活動を「県民行動プログラム」として策定しました。これを有志から成るビジョン委員が普及啓発をするとともに、多様な主体と連携しながら実践活動を進めました。

多世代交流の促進、子どもの健全な育成、芸術文化活動を通じたネットワークの構築、環境問題の解消へ向けた取組など多様な活動を実践し、約10年が経過した当時の地域ビジョンの見直しでは、住民の皆さんの参画と協働の取組の状況を踏まえ、「阪神市民文化社会ビジョン-『新しい公』の発展のために」に改訂しました。



(2) 新たな地域ビジョン策定の経緯

改訂から10年が経過し、世界も日本も大きな変革の中にあります。我が国では人口減少・超高齢化やテクノロジーの進化など、社会構造が大きく変化しています。

加えてコロナ禍で、私たちは地域で「つながる」ことの重要性を再認識しました。このような情勢のなかで、この大きな変化を乗り越えるために、地域住民が共有できる2050年の「なりたい姿」を描き、そのビジョンを地域住民、事業者、関係団体、行政等の多様な主体が共有し、実現に向けて各自の取組や施策を進めることが肝要であると考え、阪神地域における新たな地域ビジョンを策定するものです。

(3) 阪神地域ビジョン 2050 の検討

阪神地域ビジョン 2050 の策定に向け、有識者やビジョン委員代表、阪神地域の市町担当で構成する阪神新地域ビジョン検討委員会を設置し、ヒアリング・アンケート、ビジョンを語る会などでの住民の意見を踏まえ、新地域ビジョンの内容について検討し、取りまとめを行いました。



阪神地域ビジョン 2050 策定

第2章 社会的潮流

2050年の阪神地域を考えるにあたって大きな社会的潮流のなかから以下の6つの観点を取り上げ、①現在の状況や問題点（ピンチ）、②2050年に到来すると考えられる社会の姿を描くことで、このような潮流をチャンスととらえて阪神地域の未来に活かす方策を第4章において検討します。

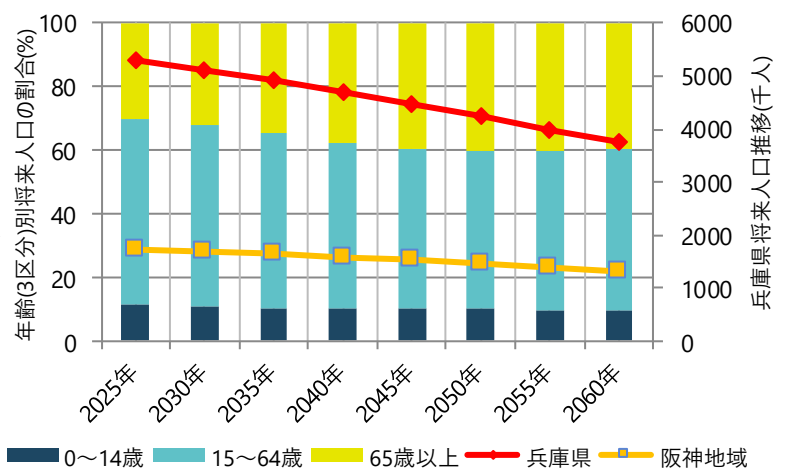
(1) 人口減少・超高齢化

① 現状・問題点

明治時代の廃藩置県によって兵庫県が発足してからはほぼ一貫して増加してきた本県の人口は、2009年を境に減少に転じ、本格的な人口減少社会に入りました。合計特殊出生率は1.4前後で推移し、未婚化・晩婚化により出生数が減少する一方、超高齢化に伴い、死亡数が増え、死亡者数が出生数を上回っています。県の推計では、2050年の県内人口は2020年比121万人減（22%減）の423万人となっています。

また、日本全体で人口の東京一極集中が進行しています。新型コロナウイルス感染症の影響により、東京以外の道府県から東京への転入超過数は、2019年の82,982人から51,857人減少し、2020年は31,125人だったものの依然として転入超過を継続しています。

その一方で、兵庫県から県外への転出超過は、2019年の6,038人から2020年は6,865人に増加しています。



兵庫県の将来人口 県推計

② 2050年一生まれる、生み出す時間と空間

国立社会保障・人口問題研究所による将来予測では、2050年の寿命は男性84.02歳、女性90.40歳です。医療技術の進展や健康志向の高まりにより、健康で元気な高齢者が増加し、働きたいと思う高齢者も多くなると考えられます。

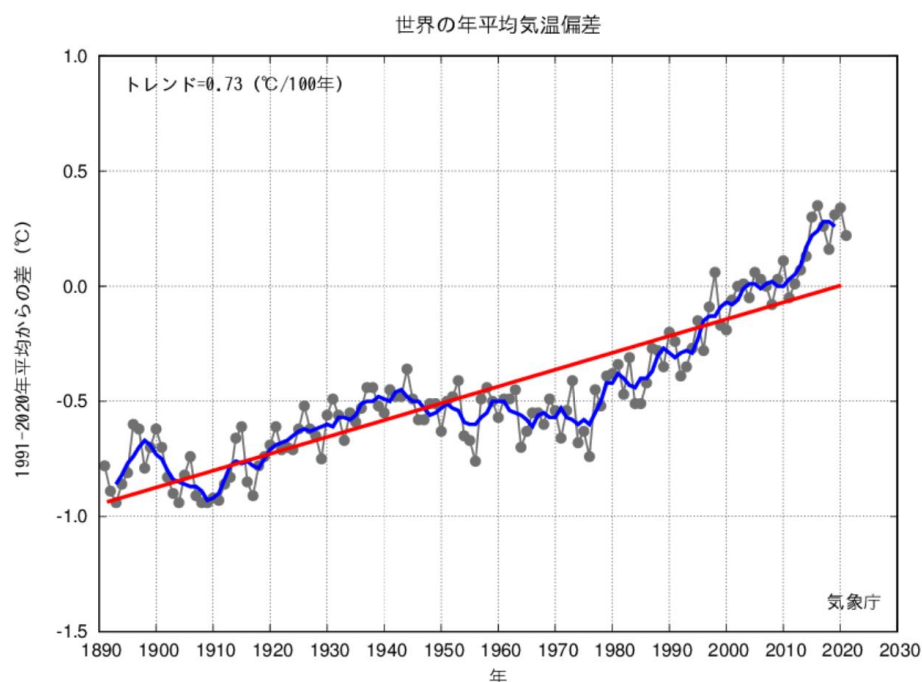
今後は、人口の流動性が高まるとともに、デジタル技術の進化で「省人化」や「自動化」などで生産性（付加価値総額÷総人口）を高めることで活力を維持・向上させることができます。そのため、ゆとりある働き方が可能となり、一人当たりが利用できる社会資本の増加や自然環境への負担軽減なども相まって、時間や空間の余裕が生まれ、その結果、地域コミュニティや新たな活動に参加できるようになるなど、地域でのゆとりのある暮らしが実現できます。

(2) 自然の脅威

① 現状・問題点

地球の気温は過去 100 年で 0.74°C 上昇しています。日本では、世界平均を上回る速さで気温が上昇しており、猛暑日や熱帯夜が顕著に増加しています。地球温暖化により風水害は激甚化傾向にあり、また、未知の感染症の発生等も懸念されます。

さらに、今後 30 年以内に 70~80% の確率で南海トラフ地震が発生するとの予測があります。



世界の年平均気温偏差(°C) 気象庁(令和4年1月時点)

② 2050 年—充実する防災・減災対策

国土強靱化により緊急輸送道路の整備や河川整備、治山ダム・砂防えん堤、防潮堤の整備、建物の耐震化などのハード対策が進み、早期避難のしくみや防災に関する人材の育成、自主防災組織の体制整備などのソフト対策が充実し、防災・減災における安全安心が進みます。

(3) テクノロジーの進化

① 現状・問題点

必要な知識や情報が共有されずに新たな価値の創出が困難となっています。その一方で、氾濫する情報のなかから必要な情報を見つけて分析する作業に、多くの労力や負担が生じています。

また、インターネットを使いこなせない人が多い年齢層があるなどの情報格差(デジタル・デバイド)が生じています。AI・IoT 技術の革新により、多くの情報を分析し、全てのモノがつながり、知識や情報が共有される社会の形成が求められています。

② 2050年ーテクノロジーの進化で変わる社会

あらゆるモノがセンサーや無線通信などによってインターネットにつながり、相互に情報交換を行う IoT が、自動車や家電、産業用途など幅広い分野に拡大していきます。モノ同士のデータの送受信等により、離れたモノの監視や遠隔操作が可能になります。

また、テクノロジーの進化や AI・IoT 等のデジタル革新により、働き方が変わるとともに、誰もが自動翻訳や同時通訳を利用できるようになり、言語が異なってもコミュニケーションができるようになります。また、VR（仮想現実）技術や AR（拡張現実）技術の日常での使用が進むことで、現実空間（オフライン）と仮想空間（オンライン）が高度に融合したシステムが整備され、社会課題の解決や一人ひとりに最適化されたサービスの提供などが実現します。それによって情報格差の解消や、ダイバーシティ^{※1}の実現がもたらされます。自動運転技術の進化だけでなく、空飛ぶクルマが利用できるようになるなど、移動手段での革命的な変化がもたらされます。

生命科学等の進展により病気や老化に対する治療における変革が起こり、寿命がさらに延びて、アクティブシニア^{※2}がさらに増加します。

このような社会や移動手段の変革は、人々の生活スタイルや働き方にも影響を及ぼし、コロナ禍においてテレワークの導入が進められたこともあり、職と住を区別してきた「ベッドタウン」の特性にも影響を与える可能性があります。

（4）世界の成長と一体化

① 現状・問題点

世界は、アジア・アフリカを中心に今後も人口や経済の成長が続き、インターネットは経済活動・情報伝達・文化交流などの様々な分野において国境を超えた活動を容易にしています。人口が増加しマーケットとしての価値が増加するだけでなく、経済分野でさらなる成長が見込まれる国々がある一方で、世界の巨大プラットフォームの出現によってインターネットを活用した事業が世界の主要産業となり、日本が誇る製造業の存在感は相対的に小さくなっています。グローバルな人の動きは拡大し、サプライチェーン^{※3}、マーケット双方の観点から、今後、世界との結びつきがますます求められています。

② 2050年ー深まる世界との結びつき

日本の成長は世界の成長と一体化しています。外国人県民との交流や多文化共生の重要性がますます高まり、世界との結びつきが一層深まる時代となります。

※1 多様性。集団において年齢、性別、人種、宗教、趣味嗜好などさまざまな属性の人が集まった状態のこと。

※2 健康志向で趣味や仕事に意欲的に取り組む高齢者

※3 製品の原材料・部品の調達から販売に至るまでの一連の流れ

(5) 経済構造の変容

① 現状・問題点

世界全体では所得格差は縮小していますが、先進国に限ると高所得者層と中間層の格差は拡大しています。

デジタル技術の進化に伴う、ビジネスモデルの変化などによって富がもたらされる一方、いわゆる「省人化」や「自動化」が進み、労働者の減少が見込まれます。一般のオフィスワーカーへの労働分配が ICT 等により減少しているとの分析もあります。

このため、デジタル経済の進展に伴って、ビジネスモデルの変化が進む中、従来の方法にとらわれることなく、兵庫の産業はどのように付加価値を生み出していくかが求められています。

② 2050年—社会の連帯を重視した取組の進化

経済のデジタル化の発展により、あらゆる情報がデジタル化され、情報の複製・加工や伝達が容易になり、経済活動に必要な複数の主体間のやりとりのコストが大幅に低下することが予想されます。

このようなデジタル化の進展は、仕事をする場所の制約をなくします。初期投資を可能な限り抑制することにつながり、スタートアップに適した環境の確保など起業への追い風となります。

また、企業は、株主優先だけではなく、社会貢献を使命とし、従業員・顧客・株主・地域社会などあらゆる利害関係者（ステークホルダー）に貢献するという潮流が生まれ、個人が持っているスキルも価値を持つ資産と見なされるようになります。各人が自由で平等な取引を行う共有型経済や労働者たちが共同で出資・経営し働くワーカーズコープが広がっています。さらにコミュニティビジネスやソーシャルビジネスなど、社会の連帯を重視した取り組みが進み、人々は企業や地域社会など望む場所で様々な勤務形態で働くことができるようになります。

(6) 価値観と行動の変化

① 現状・問題点

行き過ぎた資本主義への反省やテクノロジーの進化を背景に持続可能性の注視、多様性の尊重、自分らしい生き方の追求など新しい時代の価値観と行動が広がりつつあります。

2015年に国連が採択したSDGsは、将来世代のニーズを損なわずに現役世代のニーズを満たすことをめざし、2030年までに達成すべきゴールとターゲットを掲げています。将来世代や地球の未来に対する責任感を背景に、SDGsが世界の共通言語となったように、持続可能性を重視する価値観やライフスタイルが広がりを見せていますが、このような考え方は、特に若い世代においてより顕著であると言われています。

持続可能な社会の実現は、ESG 投資^{※1}という側面からも推進する必要がありますが、このような新しい価値観の出現や社会の変化が求められていることから、今後は、固定概念や既存の社会の枠組にとらわれない考え方や行動が求められます。

② 2050 年—サステイナブル^{※2}志向の浸透

地球環境問題を解決することが極めて重要な課題となっており、SDGs で掲げられているサステイナブル志向が個人レベルまで浸透します。そのため、環境に良い選択をする「エコ」、健康と環境を重視する生活「ロハス」、倫理的に正しい消費を行う「エシカル消費」の実践を拡大させるなど、個人・企業は、環境や健康への影響を考えそれぞれの判断に基づき行動します。

社会が絶えず変化していくことから、多様な価値観や個性を認め、お互いを尊重し、多様な視点から全体の幸福を追求するような考え方や行動が広がります。

「所有」から「利用」に変わり、インターネット上のマッチングプラットフォーム^{※3}等を通じたシェアリング・エコノミー^{※4}が拡大し、その対象はモノだけでなく、スペース、移動、スキル、お金など多岐にわたっています。

また、不特定の人（crowd=群衆）にインターネットを通じて業務委託（sourcing）するクラウドソーシングに注目が集まっています。人材を雇用するのではなく、必要などきに必要の人材を調達するという考え方で、その対象はプログラミングやウェブサイト制作等といった IT 分野中心から、企画やアイデアといった企業の中心的業務まで広がります。終身雇用制度の衰退により雇用が流動化し、一企業にとらわれない働き方や一箇所にとらわれない暮らし方など、その自由は益々高まっています。

※1 財務情報だけでなく、環境(Environment)・社会(Social)・ガバナンス(Governance)の要素も考慮した投資

※2 直訳すると「持続可能な」だが、「環境や社会を持続させることが可能な」といった意味で用いられる。

※3 モノを譲りたい、貸したい、販売したい、技術を提供したいなど、個人や法人のニーズとそれを必要とする個人や法人をマッチさせるサービスを運営するインターネットサイト

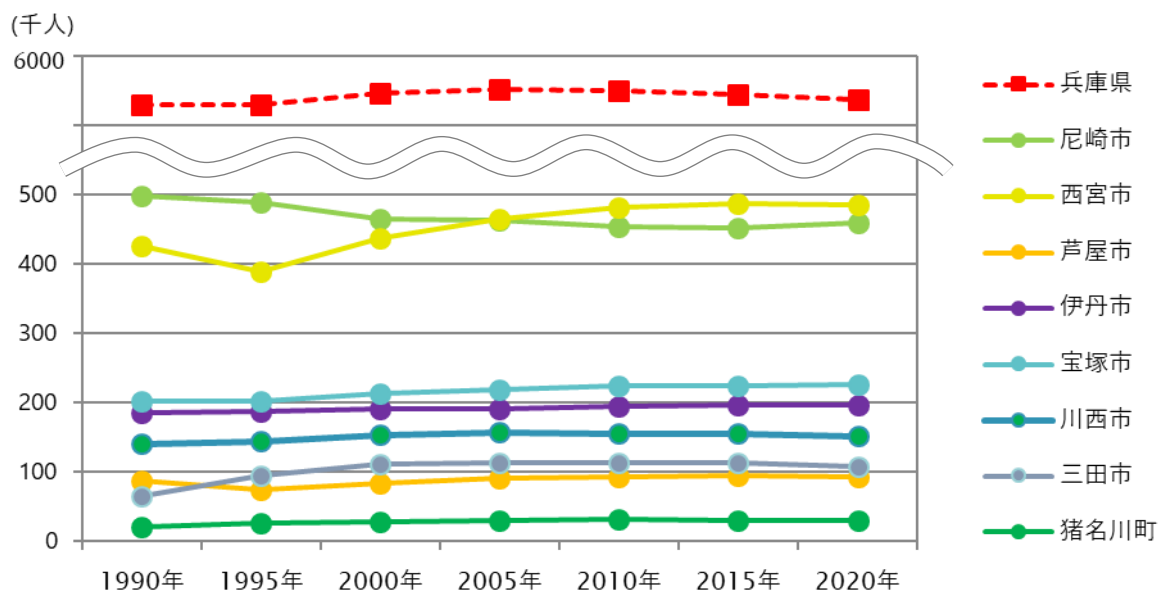
※4 インターネットを介して、個人同士でモノや場所、技術などを提供したり貸し借りしたりするサービス。カーシェアリング、民泊、クラウドソーシング、クラウドファンディングなど。

第3章 阪神地域の特性

(1) 阪神地域の人の動き

① 面積と人口

阪神地域の面積は、約 650 km²で、県全体の面積 8,400 km²の約 7.7%の面積です。また、人口は、約 175 万人（2019 年 10 月 1 日現在）で、県全体の約 540 万人（2019 年 10 月 1 日現在）の約 32%の人口を有しており、県のなかでも人口密度の高い地域です。



兵庫県、阪神の人口推移

② ファミリー層の転入と若者層の転出超過

阪神地域における転入、転出の特徴としては、30代や40代のファミリー層の転入が多く、20代の若者層が転出超過となっています。これは、地域内に数多くある大学等を卒業し、就職するために移住する若者が転出する一方で、子育てのために阪神地域に移住してくる家族層が多いためと考えられます。

③ 健康寿命県内1位

また、阪神地域は健康寿命^{※1}が長く、特に阪神北地域は2015年の健康寿命算定結果において男女とも県内1位となっています。

④ 今後の人口減少

今後の人口の推移について、県の推計^{※2}では、2050年の阪神地域の人口は約146万人で、2020年に比べ約16%減少すると見込まれています。

※1 平均寿命から寝たきりや認知症など介護状態の期間を差し引いた期間

※2 2015年の国勢調査結果とこれに基づく国立社会保障・人口問題研究所の推計結果を参考に将来人口を推計

(2) なりたち、自然・文化・歴史遺産

① 阪神地域の地形

大阪と神戸の間に位置する阪神地域は、兵庫県の南東部に位置し、尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市、三田市及び猪名川町の7市1町からなっています。

この地域は、東は大阪府、西は神戸市及び北播磨、北は丹波、南は大阪湾に面しています。

地域内の地形については、北部に六甲・北摂連山、南部に大阪湾沿岸部を有し、武庫川水系・猪名川水系の本支流が流れ、北西部に三田盆地、南部には甲子園浜、御前浜、香櫨園浜、芦屋浜などがあり、利便性の高い生活環境を生み出す平野に加えて、河川や浜辺、山林などの多様な自然環境が住民の生活や心に潤いをもたらしています。



② 近世までの発展の軌跡

明治の廃藩置県以前、阪神地域は、畿内に属する旧摂津国の一部でした。律令時代は山陽道が走り、尼崎は京や奈良の巨大社寺を造営する材木を西国から運ぶ中継港として栄えました。江戸時代には山陽道は西国街道と言われるようになりましたが、街道沿いの昆陽宿や西宮宿が宿場町として栄え、また、尼崎藩の城下町^{※1}、三田藩の城下町^{※2}としても栄えました。

この地域は古くから政治、経済、文化などの先進地であったため、歴史遺産も数多くあり、古くは、廣田神社^{※3}や中山寺^{※4}を始めとした由緒ある神社仏閣、清酒発祥の地であり下り酒が生んだ文化、俳諧や人形浄瑠璃^{※5}、能（舞台）など長い歴史を持つ文化が蓄積されています。

※1 阪神電鉄出屋敷駅東側から阪神電鉄大物駅西側のあたり

※2 現在の県立有馬高等学校、市立三田小学校の周辺

※3 西宮市にある神社。神功皇后の創建と伝えられている。

※4 宝塚市にある寺院。聖徳太子の創建と伝えられている。

※5 文楽（人形浄瑠璃）の源流は、西宮神社（えべっさん）ゆかりの人形芝居「えびすかき」と言われている。えびすかきは室町時代から諸国を回り、えびす信仰を広めた。

また、地域内には二つの日本遺産（『1300年続く日本の終活の旅～西国三十三所観音巡礼～』（大本山中山寺）、『「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷』）があります。

酒造家たちは江戸積み酒造で築いた富をこの地域の発展のために使い、芸術や教育の振興に力を注ぎました。このような豊かな文化や気風が、明治時代以降の近代化につながりました。

③ 近代の発展の軌跡

明治時代以降、港湾都市として発展する神戸と、上方の伝統文化を継承しつつ更に発展していく大阪との間に位置することから、多くの人々が移住し続け、都市化が進展するとともに、経済も発展を遂げてきました。

近代化政策を背景に、官営鉄道東海道本線や阪鶴鉄道（主に現在の JR 福知山線を運行）などが営業を開始し、その後、阪神電気鉄道（株）が神戸[三宮]—大阪[出入橋]間、箕面有馬電気軌道（株）（現 阪急電鉄（株）。以下「阪急電鉄」という。）が宝塚本線[梅田—宝塚]及び箕面線[石橋—箕面]の営業を相次いで開始し、それから一世紀以上を経ました。

阪急電鉄は宝塚唱歌隊（後の宝塚歌劇団）を結成し、宝塚歌劇や宝塚温泉などに乗客を誘導するとともに、沿線で住宅開発を進めました。

また、阪神沿線・阪急神戸線沿線は、西宮七園^{※1}、甲子園娯楽場（後の甲子園阪神パーク）、甲子園ホテルなどのある一大リゾート地でもあり、資産家や文化人、外国人などの住宅や別荘の建築が進んだことも一因となり、和洋折衷のモダンな生活スタイルや、ゴルフやテニスのような近代スポーツの広まりも見られ、「阪神間モダニズム^{※2}」に代表される特徴的な文化を生み出しました。

そして、工業地帯としても発展するなかで、多数のサラリーマンの移住が進み、これらの人々は「阪神間モダニズム」の新たな担い手となり、阪神地域はわが国のライフスタイルを先導する地域として、独自性を発揮することとなりました。

※1 西宮市にある七つの「園」のつく高級邸宅街の総称。甲子園、昭和園（現在の「北昭和町」・「南昭和町」）、甲風園、甲東園、甲陽園、苦楽園、香櫨園の七つからなり、それぞれ明治から昭和初期に開発された。

なお、当初、甲子園は野球場やホテルなどの総合リゾートや住宅地、甲東園は農園、甲陽園は郊外遊園地や高級旅館・料理屋や映画製作所など、苦楽園は温泉リゾート、香櫨園は遊園地として開発され、現在は住宅地となっている。

※2 阪神間モダニズムとは、明治末期から昭和初期にかけて、阪神間で新しく生まれたライフスタイル、生活・産業、芸術文化（文学、音楽、美術、写真、演劇など）とそれに関連する学問、建築、娯楽、ファッション、スポーツ、価値観などの時代の潮流。単なる西欧化ではなく、阪神間において脈々と受け継いできた日常生活の様々な場面に西欧様式を取り入れ、独自に育み花開いた。

高度経済成長期以降、経済が発展していくなかで、住宅地として開発が進み、多田グリーンハイツ（川西市）、阪急日生ニュータウン（川西市、猪名川町）といったニュータウンが生まれ、さらにその後三田市の10年連続人口増の原動力となった北摂三田ニュータウンのフラワータウンやウッディタウンなどが各地に生まれました。そのような状況のなかで、能勢電鉄株の路線は通勤路線へと変化していきました。また、神戸電鉄株公園都市線が営業を開始し、現在のような街並や鉄道網が形成されていきました。

現在は、特色のある博物館、美術館やホール、スポーツ施設もあり、地域と一体となった芸術活動や、スポーツ活動が展開されています。こういった様々な地域資源としての強みが、阪神地域が住みたい街に選ばれる要因となっています。



宝塚歌劇場（宝塚市）



阪神甲子園球場（西宮市）

（3）寛容性のある風土

① 寛容性がある地域

阪神地域は、その歴史を振り返ってみると、他地域の人や外国人が流入し、その人々が持っていた文化、いわゆる異国文化に代表される異文化を柔軟に受け入れて発展してきた地域であり、新しい考え方や文化、多様な活動をする人たちを受け入れることができる寛容性がある地域です。

② 高等教育機関の集積と変革の姿勢

現在は、数多くの大学や短期大学といった高等教育機関が集積するなど、知が集積する県内有数の地域であり、そこに通学する学生がいることから若者が多い地域でもあります。また、先駆的な芸術家、社会活動、起業に向けた機運の高さに見られるように、変革の姿勢がある地域でもあります。

③ 地域活動や生活における満足度が高く住みやすい地域

大阪と神戸の間に位置する阪神地域は、南部には都市型住宅地、北部には郊外型ニュータウンが形成され、多様で良好な住宅地を形成しています。県民意識調査^{※1}では、「住んでいる地域のことに関心がある」、「住んでいる地域への愛着や誇りを感じ

※1 兵庫県が、政策形成・施策運営の基礎資料を得るために、無作為抽出法により実施している意識調査。毎年度設定しているテーマや、21世紀兵庫長期ビジョン（2001年策定、2011年改訂）が描く社会像の評価指標である「兵庫のゆたかさ指標」といった内容について、意識調査を実施

じる」、「今の生活に満足している」という人の割合は、県内の他地域と比べ高い割合で推移し、全県平均を上回っています。この調査結果からみると、阪神地域は自分の活動や生活における満足度が高く、自分自身の生活スタイルを自由に設計する余裕が相対的に高い地域であるとも言えます。

④ 高齢者への期待と社会貢献に対する意識

核家族化や就労環境の変化により、子育てに関する不安を感じる家庭が増えており、少子高齢化問題を深刻化させています。高齢化率は上昇しているものの、阪神地域は健康寿命が長く、活動的なアクティブシニアも多い地域です。もはや「65歳以上」を高齢化と定義する必要がない社会となっており、生涯学習などの生きがいがづくり、地域での子育て支援、高齢者の見守りなど、地域社会の担い手としての社会的役割が期待されています。

県民意識調査では、「住んでいる地域をより良くしたり、盛り上げたりする活動に参加している」、「参加したい」という人の割合が、県内の他地域に比べて高くなっており、社会貢献をしている人、意欲のある人が比較的多いことから、多様な生き方を選ぶことができることや、多様な人材が活躍する場がさらに充実することが望まれます。

⑤ 仕事に対する意識

県民意識調査では、「理想的な仕事」として、「自分にとって楽しい仕事」「自分の専門知識や能力を活かせる仕事」「世の中のためになる仕事」をあげる人が、県内他地域より高い結果になっています。

今後、健康で就労可能な期間の延長も見込まれるため、就労環境の整備状況により起業や複業、転職の可能性が広がります。

⑥ 地域に根付く文化芸術

阪神地域で展開されたアートである具体美術、若者を中心に運営される音楽フェス、アートイベント、ダンスや小劇場演劇、市民オペラや交響楽団など地域に自らがつくる文化芸術の気風が広がっている地域です。盛んなオープンガーデンや手工芸など、生活の一部にアートが根付いており、県民意識調査では、県内の他地域に比べ、文化芸術活動、地域のイベントへの満足度が高い結果になっています。

このような阪神地域の持つ寛容性を活かし、多様な主体がいろいろな分野で一層活躍することが求められます。

(4) 環境への配慮

① 環境問題と尼崎臨海地域における環境共生型のまちづくり

高度経済成長期の産業活動や大規模開発に伴い、大気汚染や水質汚濁、自然環境破壊など、様々な環境問題に直面しましたが、公害対策や環境保全に取り組み、改善に成果を上げてきました。また、地球温暖化の影響は、農業、林業、水産業、水環境・水資源、自然生態系、都市生活など、あらゆる分野に影響を及ぼしています。

阪神地域の南部では、尼崎臨海地域を魅力と活力あるまちに再生するため、陸域での環境負荷を少なくするとともに、ゆとりと潤いをもたらす水と緑豊かな自然環境の創出による環境共生型のまちづくりをめざす「尼崎 21 世紀の森構想」に取り組んでいます。



尼崎臨海地域



尼崎 21 世紀の森

② 里山の保全と北摂地域の活性化

阪神地域の北部では、交通網が充実したニュータウンが多く開発されてきましたが、一方で、森林面積が約 6 割を占めています。森林の約 9 割が天然林であり、今なお、歴史・文化や生物多様性などを保つ里山が数多く残されていることから、北摂里山の持続的な保全を図り、北摂地域の活性化につなげるため、天然記念物の保全・管理や環境学習の支援などを担っている地域団体等とも連携しながら、「北摂里山博物館(地域まるごとミュージアム) 構想」を推進しています。

③ 自然環境保全活動のデジタル化

少子高齢化により、環境保全活動団体などの担い手の不足、空き家や空き地の増加による環境の悪化などが進むことで、このような自然環境保全活動に影響を与えています。

都市に近い里浜や北摂里山のような阪神地域固有の自然環境を守り、地域環境の恵みを持続的に享受していくためには、AI や IoT に代表されるデジタル技術を活用した CO2 削減への取組と脱炭素社会への前進が必要です。

(5) 多彩な産業の集積

① 多彩な産業

阪神地域では、地域特性に応じた多彩な産業が展開されています。

明治時代には、産業活動が盛んな大阪と、世界交易が進展する神戸の間にあることから、尼崎の臨海部を中心に多数の企業が立地し、日本を支える工業地帯^{※1}として発展しました。

現在では、ものづくり産業や起業が活発であり、商店街を地域住民が日常的に利用するなど、商工業も盛んです。

② 豊かな農林畜産物

阪神地域では、市街化区域内での都市農業や、消費地との近接性を活かした都市近郊農業が営まれており、葉物野菜やいちじく、北摂栗、三田牛、北摂原木しいたけなど多彩な農林畜産物を生産しています。市民農園や観光農園、阪神産食材を用いた飲食店など、多様な「農」や食に関わる活動拠点をアトラクションとし、地域全体をテーマパークと見立て、農業者、食関連等事業者、消費者が連携して都市・都市近郊農業の振興を図る「阪神アグリパーク構想」を推進しています。



③ 銘醸の集積

2020年6月には、『「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷』が日本遺産として文化庁に認定されました。江戸時代、清酒（澄み酒）発祥の地である伊丹や、伊丹から酒造りを導入した灘五郷（神戸市、西宮市）で生産された清酒が、酒輸送専用の船（樽廻船）により下り酒として江戸へ届けられました。現在では、灘五郷は日本最大の清酒酒造地帯であり、全国の清酒生産量の約4分の1を兵庫県が占めています。伊丹や灘五郷（灘五郷のうち西宮郷及び今津郷）のような銘醸地が集積していることも阪神地域の特色です。

④ 物流と産業を支える交通

2018年には大阪北部から神戸市まで延伸した新名神高速道路が開通し、川西市内にインターチェンジが開設され、中国自動車道、名神高速道路、阪神高速道路神戸

※1 大阪湾岸から内陸部にかけて広がる工業地帯は阪神工業地帯といわれており、日本の三大工業地帯の一つ

線・北神戸線・湾岸線とあわせ、物流の効率化や地域産業の活性化を支えています。
 また、名神湾岸連絡線や大阪湾岸道路西神部の整備が進められており、今後さらなる物流の効率化や地域産業の活性化が期待されます。

(6) 阪神・淡路大震災の経験を活かした災害への備え

① これまでの取組

武庫川は「摂津の人取り川」と言われ、古くから氾濫を繰り返し、大洪水のたびに自由奔放に流れを変えた暴れ川で、幾多の水害をもたらしました。そのため、江戸時代中期から、数多くの治山治水工事が行われてきました。明治時代には武庫川の支川である逆瀬川^{※1}において県で初めての砂防工事を行い、大正時代には武庫川の大改修を行うなど、継続的に災害対策を行ってきました。

② 阪神・淡路大震災の経験

1995年に阪神・淡路大震災の被災地として甚大な被害を受けましたが、この震災は、普段から災害に備えることの重要性に気づかせるとともに、「ボランティア元年」とも言われるなど、多くの人々がボランティア活動を行うことが当たり前になる契機ともなりました。被災時に助けあえる地域コミュニティの重要性が認識され、創造的復興を成し遂げる過程で、県民の参画と協働によるまちづくりの推進など、新たな文化や価値観も生まれました。

③ 災害への備え

今後南海トラフ地震の発生も想定されることから、防潮堤の沈下対策などの津波対策を行っています。

また、近年、地球温暖化の影響などにより豪雨災害や台風災害が激甚化、頻発化しており、武庫川の総合治水対策などハード面においても整備を進めています。2018年の台風第21号による浸水被害を受け、再度災害を防止するため、防潮堤のかさ上げなどの高潮対策を行っています。

一方、防災士^{※2}の資格を取得した方が多くいるなど、住民の防災意識も高い地域です。今後とも住民一人ひとりの防災意識を地域が一体となり醸成し、自主防災力のさらなる向上が望まれます。

全国、近畿、阪神地域の防災士登録者数（令和3年10月末時点）

| 近畿府県名 | 防災士認証登録者数（人） | 市町名 | 防災士認証登録者数（人） |
|-------|--------------|------|--------------|
| 滋賀県 | 2,658 | 尼崎市 | 400 |
| 京都府 | 1,617 | 西宮市 | 558 |
| 大阪府 | 8,401 | 芦屋市 | 311 |
| 兵庫県 | 7,455 | 伊丹市 | 224 |
| 奈良県 | 3,515 | 宝塚市 | 321 |
| 和歌山県 | 2,515 | 川西市 | 221 |
| 全国合計 | 215,515 | 三田市 | 283 |
| | | 猪名川町 | 80 |
| | | 兵庫県計 | 7,455 |

※1 逆瀬川は「兵庫県砂防発祥の地」と言われている

※2 阪神・淡路大震災をきっかけとして創設された制度で、“自助”“共助”“協働”を原則として、社会の様々な場で防災力を高める活動が期待され、十分な意識と一定の知識技能を修得したことを日本防災士機構が認証した人

第4章 地域ビジョンの実現に向けたシナリオ

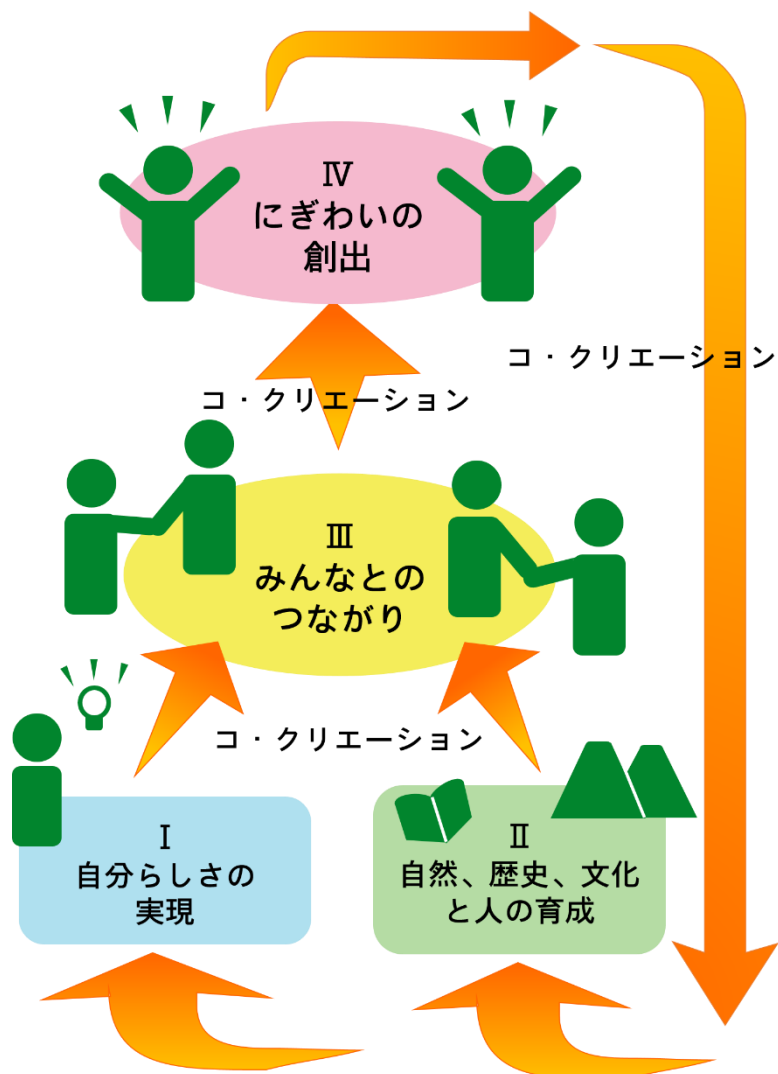
(1) 地域ビジョンの基本理念

「コ・クリエーション（共創）が育む阪神地域」

第3章で述べたように、阪神地域は、古くから地域の人々が協働し、“個”がさまざまな“個”と共に新たな文化を創りだしてきた地域です。“個”と“個”の出会いが寛容に互いを認め合い、生み出す行動は「co-creation」として新しい価値を見いだします。

阪神地域のビジョンを実現させるためには、多様な立場の人がつながり、対話しながら新しい価値を共に創ること「コ・クリエーション」が必要です。この動きを続けることが、さらに阪神地域を育みます。

2050年に向け、これまでの地域の歴史を活かし、様々な分野での「コ・クリエーション」が、阪神地域のさらなる活力と豊かな暮らしを育んでいくことを基本理念に掲げました。



I～IVについては次ページ以降の4つの方向性とリンクしています。

(2) 地域ビジョンの実現に向けた方向性

基本理念である、「コ・クリエーション（共創）が育む阪神地域」を実現するための方向性を県民との多様な意見交換を重ね、4つのグループに分けました。

一つめは“個”の豊かさの創出、コ・クリエーションのもととなる「自分らしいスタイルが実現できるまち」、二つめは、先人たちが積み上げてきた地域の財産を学び、未来に繋げる「自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち」、三つめは、これらをもとに、人とつながり豊かになった個が相乗効果を生み、より豊かな地域に発展する「みんながつながるやさしいまち」、四つめは、歴史的な蓄積や阪神間の資源を介して賑わいという形で阪神間らしさを発現する「にぎわいのあるまち」としました。そして、豊かなまちとなることで、これらの方向性がさらに充実していくことも期待できます。

2050年に目指したい具体的な姿の実現に向け、18のシナリオを作成しました。

I 自分らしいスタイルが実現できるまち

利便性と自然環境のバランスがとれた地域で、ICTやAIなどの進化する技術を活用しながら、起業やまちづくりの活動、職住近接などを通じて、わくわく感や面白いことに挑戦できる地域を目指します。また、時間や空間にゆとりを持った多様な暮らしの実現と、ノーマライゼーション^{*1}やジェンダーフリー^{*2}の理念のもと、多様な人々が自分らしいスタイルを実現できるまちを目指します。

| | | |
|---|----------------------|----|
| 1 | 地域と趣味としごとが重なる暮らし | 22 |
| 2 | いつからでも誰でもスタートアップ | 24 |
| 3 | 多様な人々が住みやすいまち | 26 |
| 4 | 多文化共生で人々がいきいきと暮らせるまち | 28 |

II 自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち

北摂の里山、沿岸部の阪神なぎさ回廊、阪神間モダニズムに代表されるこの地域に息づく文化や歴史などの様々な地域資源をまもり、次世代へ継承させる取組を進めます。豊かな地域資源を地域住民自身も体感することによって、こころ豊かで、地域に愛着を持った人を育て、次世代への継承を目指します。

| | | |
|---|--------------------|----|
| 5 | 未来まで続く花と緑と里山 | 30 |
| 6 | みんなが憩う阪神なぎさ回廊 | 32 |
| 7 | 再発見で魅了する「阪神間モダニズム」 | 34 |
| 8 | 生涯の学びと次世代につなぐ阪神文化 | 36 |

Ⅲ みんながつながるやさしいまち

都市部特有の近所付き合いの希薄化、少子高齢化が進む中、既成の概念にとらわれない新しいスタイルのコミュニティを形成しながら、自身が望むようなつながりを持てたり、世代を超えてつながることができるまちを目指します。

また、脱炭素社会に向けた取組や、災害時にも誰一人取り残さないまちを目指します。

| | | |
|----|----------------------|----|
| 9 | 世代を超えてつながるまち | 38 |
| 10 | 自分にあった”つながり”に参加できるまち | 40 |
| 11 | 地域で循環するエネルギー | 42 |
| 12 | みんなで進める防災・減災 | 44 |
| 13 | いきいき健康 100 年人生 | 46 |

Ⅳ にぎわいのあるまち

宝塚大劇場や甲子園球場のような多様な観光施設や、「『伊丹諸白』と『灘の生一本』下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷」などの日本遺産、豊富な地域資源の磨き直し、おいしい地元産の食により、外国人も含む人々の交流の促進を図り、いっそうにぎわいのあるまちを目指します。

| | | |
|----|---------------------|----|
| 14 | アートによるクリエイティブな環境づくり | 48 |
| 15 | 訪れたい訪れやすい阪神地域ツーリズム | 50 |
| 16 | 美味しい「食」と多彩な「農」 | 52 |
| 17 | まちなかのにぎわいを創出する | 54 |
| 18 | みんなで楽しむスポーツ | 56 |

※1 障害者が他の一般市民と同様に社会の一員として種々の分野の活動に参加することができるようにする理念

※2 固定的な性別に基づく役割分担にとらわれず、一人一人が自由に平等に行動、選択するという考え方

(3) シナリオ

社会的潮流の速さとポストコロナ社会のなかで、およそ 30 年後の 2050 年を展望することは、容易なことではありません。

この期間を「課題」「将来への取組」「2030 年頃の間画像」と段階的に分け、最終的「2050 年にめざしたい姿」を描きました。

「2030 年頃の間画像」の状況を踏まえて、「2050 年にめざしたい姿」が増える可能性があります。

シナリオ

I 自分らしいスタイルが実現できるまち

1

地域と趣味と仕事が重なる暮らし

○ 大阪や神戸のベッドタウンとして、阪神間の複数の市が毎年、「住みたい街ランキング」に名を連ねています。

○ 新型コロナウイルス感染拡大防止策で業務のデジタル化が進行し、働く場所や働き方が変化し、通勤に便利で「通いやすいまち」や地域とのつながりが持てる「住みやすいまち」を希望する人も増えています。


○ 働く場所や働き方が変化することによりコミュニティへの関わり方や自分時間を考える機会になります。

課題

将来 2 取組

●柔軟な働き方に対する勤務環境が未整備である

- ・副業（複業）ができない勤務条件になっている
- ・勤務形態や勤務時間が固定的であるため、生活スタイルに合わせた柔軟な勤務ができない
- ・家族の転勤に合わせて転居する必要があり、継続して勤務することが困難になる
- ・企業によってはテレワークの環境整備や移行が不十分である
- ・有給休暇を取得しにくい雰囲気や、長時間労働で趣味ややりたいことをする時間がとれない



地域でのイベント

●テレワーク環境の整備など、業務環境の整備を推進する

- ・労働市場の流動性を高め、複業、マルチワーカーの認知度を上げる
- ・企業は多様な働き方を実現するためのガイドラインを整備する
- ・企業は在宅勤務に対応する機器の整備等、業務のデジタル化（テレワーク）を推進する
- ・長時間労働を是正するために、企業が ICT 化などによって業務改善を進める
- ・地域の活動や趣味の集まりに気軽に参加できるように、情報を発信する

【みんなの声】

・（移住関連の話について）リモートワークの普及によって、都市から離れた場所でも仕事ができるという状況になれば、移住のしやすい環境になり、地域とのつながりもできるのではないだろうか。

※複業 複数の仕事を持つこと

※副業 メインになる本業が他にあることが前提で、サブ（補助）として収入を目的に行う仕事のこと

22

1

シナリオ項目に関する現状を記載しました。

2

2030年頃の間接像を目指すために現時点から2030年までに取り組むことを記載する項目です。

3

主に阪神地域の住民が行動する取組について記載していますので、主語を省略している場合の行動主体は阪神地域の住民とします。

4

「みんなの声」「生産者の声」「外国人の声」「地域デザインを考えるワークショップでの意見」等は、ヒアリング、アンケート調査、ビジョンを語る会、地域デザイン会議等により聴取した県民の方々の意見を記載しました。シナリオ等の作成にあたり県民の皆さんにいただいたご意見は資料編にまとめています。

I 自分らしいスタイルが実現できるまち

| 2017 | | 2018 | | 2019 | | 2020 | | 2021 | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 1位 | 西宮北口 | 1位 | 西宮北口 | 1位 | 西宮北口 | 1位 | 西宮北口 | 1位 | 西宮北口 |
| 2位 | 梅田 | 2位 | 梅田 | 2位 | 梅田 | 2位 | 梅田 | 2位 | 梅田 |
| 3位 | なんば | 3位 | 神戸三宮 | 3位 | 神戸三宮 | 3位 | 神戸三宮 | 3位 | 神戸三宮 |
| 4位 | 夙川 | 6位 | 夙川 | 5位 | 夙川 | 6位 | 夙川 | 6位 | 夙川 |
| 11位 | 宝塚 | 12位 | 宝塚 | 11位 | 宝塚 | 13位 | 宝塚 | 12位 | 宝塚 |
| 12位 | 芦屋川 | 17位 | 芦屋川 | 17位 | 芦屋川 | 17位 | 芦屋川 | 13位 | 芦屋川 |
| | | 20位 | 西宮 | 20位 | 西宮 | 19位 | 尼崎 | | |
| | | | | | | 20位 | 西宮 | | |

出典：SUUMO 住みたい街ランキング関西版（リクルート調べ）

2030年頃の間接像

●柔軟な働き方や生活スタイルが実践され住みやすさを実感できる

- ・複業や地域活動ができ、趣味の発見や実現など柔軟な働き方や生活スタイルを実現している
- ・複業の実施により、いずれかが失敗しても経済的に困窮しない、セーフティネットが実現している
- ・在宅勤務など働き方の変化により、転勤に伴う転居や退職が必要でなくなる
- ・本来業務とは違う仕事を通じて、自分がやりたい仕事を実現できるようになっている
- ・通勤に便利で、大阪や神戸に「通いやすいまち」から本当に「住みやすいまち」と感じるようになっていく

【雇用労働関係団体の声】

・2019年にスタートした国の働き方改革関連制度により、長時間労働の是正や年次有給休暇の取得について、経営者及び労働者の意識は変化し、「ワーク・ライフ・バランス」の実現を目指す動きは確実に高まっている。

・一昔前までは企業に就職する際、将来性が就職の決め手の上位にあったが、今は「ワーク・ライフ・バランス」が上位にくる。

2050年にめざしたい姿

●地域と趣味と仕事が重なる暮らしを実現する

- ・家庭、職場以外の趣味や地域活動の場のサードプレイスができて、時間や気持ちにゆとりができる
- ・集う人がいて、住みたいまちに住み続けることができる
- ・居住地域と働く地域の二拠点生活（複数拠点生活）が当たり前になっている

【みんなの声】

・若者や会社員等が働きながらまちづくりに関わられるような活動の仕方を考える必要がある。

【地域おこし活動者の声】

・仕事と趣味、やりたいことの両立、重なりが増えてくる。



芦屋浜上空

地域と趣味と仕事が重なる暮らし

- 大阪や神戸のベッドタウンとして、阪神間の複数の市が毎年、「住みたい街ランキング」に名を連ねています。
- 新型コロナウイルス感染拡大防止対策で、業務のデジタル化が進行し、働く場所や働き方が変化し、通勤に便利で「通いやすいまち」から、地域とのつながりが持てる「住みやすいまち」を希望する人も増えています。
- 働く場所や働き方が変化することによりコミュニティへの関わり方や自分時間を考える機会になります。

課題

●柔軟な働き方に対する勤務環境が未整備である

- ・ 副業（複業）ができない勤務条件になっている
- ・ 勤務形態や勤務時間が固定的であるため、生活スタイルに合わせた柔軟な勤務ができない
- ・ 家族の転勤に合わせて転居する必要があり、継続して勤務することが困難になる
- ・ 企業によってはテレワークの環境整備や移行が不十分である
- ・ 有給休暇を取得しにくい雰囲気や、長時間労働で趣味ややりたいことをする時間がとれない



地域でのイベント

将来への取組

●テレワーク環境の整備など、業務環境の整備を推進する

- ・ 労働市場の流動性を高め、複業、マルチワーカーの認知度を上げる
- ・ 企業は多様な働き方を実現するためのガイドラインを整備する
- ・ 企業は在宅勤務に対応する機器の整備等、業務のデジタル化（テレワーク）を推進する
- ・ 長時間労働を是正するために、企業が ICT 化などによって業務改善を進める
- ・ 地域の活動や趣味の集まりに気軽に参加できるように、情報を発信する

【みんなの声】

- ・ (移住関連の話について) リモートワークの普及によって、都市から離れた場所でも仕事ができるという状況になれば、移住のしやすい環境になり、地域とのつながりもできるのではないだろうか。

※複業 複数の仕事を持つこと

※副業 メインになる本業が他にあることが前提で、サブ（補助）として収入を目的に行う仕事のこと

住みたい街ランキング（関西）の推移 20位以内にランキングされた阪神地域の駅名

| 2017 | | 2018 | | 2019 | | 2020 | | 2021 | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 1位 | 西宮北口 | 1位 | 西宮北口 | 1位 | 西宮北口 | 1位 | 西宮北口 | 1位 | 西宮北口 |
| 2位 | 梅田 | 2位 | 梅田 | 2位 | 梅田 | 2位 | 梅田 | 2位 | 梅田 |
| 3位 | なんば | 3位 | 神戸三宮 | 3位 | 神戸三宮 | 3位 | 神戸三宮 | 3位 | 神戸三宮 |
| 4位 | 夙川 | 6位 | 夙川 | 5位 | 夙川 | 6位 | 夙川 | 6位 | 夙川 |
| 11位 | 宝塚 | 12位 | 宝塚 | 11位 | 宝塚 | 13位 | 宝塚 | 12位 | 宝塚 |
| 12位 | 芦屋川 | 17位 | 芦屋川 | 17位 | 芦屋川 | 17位 | 芦屋川 | 13位 | 芦屋川 |
| | | 20位 | 西宮 | 20位 | 西宮 | 19位 | 尼崎 | | |
| | | | | | | 20位 | 西宮 | | |

出典：SUUMO 住みたい街ランキング関西版（リクルート調べ）

2030年頃の間画像

●柔軟な働き方や生活スタイルが実践され住みやすさを実感できる

- ・複業や地域活動ができ、趣味の発見や実現など柔軟な働き方や生活スタイルを実現している
- ・複業の実施により、いずれかが失敗しても経済的に困窮しない、セーフティネットが実現している
- ・在宅勤務など働き方の変化により、転勤に伴う転居や退職が必要でなくなる
- ・本来業務とは違う仕事を通じて、自分がやりたい仕事を実現できるようになっている
- ・通勤に便利で、大阪や神戸に「通いやすいまち」から本当に「住みやすいまち」と感じるようになっている

【雇用労働関係団体の声】

- ・2019年にスタートした国の働き方改革関連制度により、長時間労働の是正や年次有給休暇の取得について、経営者及び労働者の意識は変化し、「ワーク・ライフ・バランス」の実現を目指す動きは確実に高まっている。
- ・一昔前までは企業に就職する際、将来性が就職の決め手の上位にあったが、今は「ワーク・ライフ・バランス」が上位にくる。

2050年にめざしたい姿

●地域と趣味としごとが重なる暮らしを実現する

- ・家庭、職場以外の趣味や地域活動の場のサードプレイスができ、時間や気持ちにゆとりができる
- ・集う人がいて、住みたいまちに住み続けることができる
- ・居住地域と働く地域の二拠点生活（複数拠点生活）が当たり前になっている

【みんなの声】

- ・若者や会社員等が働きながらまちづくりに関わられるような活動の仕方を考える必要がある。

【地域おこし活動者の声】

- ・仕事と趣味、やりたいことの両立、重なりが増えてくる。



芦屋浜上空

- 阪神地域は兵庫県下でも大学等の高等教育機関が多い地域で、各大学では社会人を対象とする様々な公開講座が実施されています。
- 長寿化、また雇用形態や就業形態が多様化する時代では、社会人向けの学び直しやスキルアップのために高度で専門的な知識を習得する機会を求める声もあります。
- 新規分野における起業のスタートアップを支援できるまちを目指します。

課題

●社会人がスキルを学び直せる機会が少ない

- ・ 学校を卒業、就職したあとに再び学ぶ機会を持つ人が少ない
- ・ 実社会で磨いてきた技術や知識について、学びなおしによりブラッシュアップする機会がない
- ・ 阪神地域には多くの大学・大学院があり、専門的知識を習得できる環境にあるが、十分に活用されていない
- ・ デジタル技術の進展で「省人化」や「自動化」が進み、高付加価値化への追求が懸案となっている
- ・ 起業にチャレンジしたいが、失敗時の生活不安や経済的懸念があるため、ハードルが高い

※ブラッシュアップ

現状よりもよい状態を目指して、洗練させ完成度を高めること

教育機関の数

| | 各種学校 | | 大学 | | 短期大学 | |
|------|------|-------|-----|-------|------|-------|
| | 国公立 | 私立 | 国公立 | 私立 | 国公立 | 私立 |
| 兵庫県 | — | 75校 | 5校 | 31校 | — | 17校 |
| 阪神地域 | — | 23校 | — | 10校 | — | 9校 |
| 全県比率 | — | 30.7% | — | 32.3% | — | 52.9% |

大学本部（事務局）の所在地により集計 出典：令和2年度学校基本調査。R2.5.1現在

将来への取組

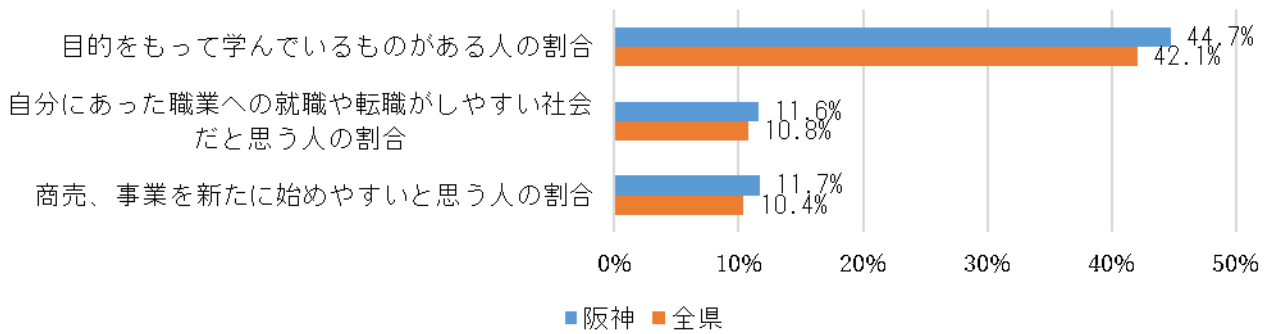
●高度な専門的知識を習得する機会が広がる

- ・ 専修学校、大学や大学院は、社会人が高度で専門的な知識を習得できるように、返還不要の奨学金制度や、受講しやすい時間帯の設定などに取り組む
- ・ 大学・大学院等は、産業界と連携、接続を強化し、幅広い分野の教育プログラムを構築し、社会人が学べる機会を拡充する。
- ・ 労働力の高生産性、高付加価値化の追求と実現のため、起業への理解を高める
- ・ ジョブ型雇用の導入も検討する企業が増える

※ジョブ型雇用

企業が人材を採用する際に職務、勤務地、時間などの条件を明確に決め、別部署や他拠点への異動、転勤がない雇用契約のこと

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

●起業、複業、転職へのハードルが低くなる

- ・ 阪神地域内の大学を中心として、学びなおしを目的とする企業人のスキルアップ講座が普及している
- ・ 卒業→就職→定年という単一的なライフサイクルが見直されている
- ・ 起業、複業、転職がしやすい環境に変化している
- ・ デジタル化の進展やサブスクリプション、シェアリングエコノミーの浸透で起業の初期費用の低廉化が進んでいる
- ・ ジョブ型雇用の普及と定年の形骸化により、社会人自身が学び直しを必要とする



地域での学習機会

※サブスクリプション

商品ごとに購入金額を支払うのではなく一定期間の利用権として定期的に料金を支払う方式

2050年にめざしたい姿

●起業、複業、転職がしやすく、スタートアップを支援するまちへ

- ・ 企業と大学が連携し、リカレント教育で自己の能力を磨き直すことが常態化している
- ・ スキルアップ講座で身につけた力で起業、複業、転職が自由になっている
- ・ 新規分野で起業や複業した人が集い、お互いにスタートアップを支援するまちになる
- ・ スタートアップ企業の関係者が集い、ノウハウを地域に還元している

【商工団体の声】

- ・ 起業・創業を目指す若者が、その技能・経験を身につけるため、市内の多種多様な事業者が受け入れる仕組みづくりを模索するなど、自分自身が起業・創業する貴重な人材として市域の中で育ていけるシステムを構築する。

※リカレント教育

生涯にわたって教育と就労のサイクルを繰り返す教育制度

※スタートアップ企業

革新的な商品、サービスで社会的な課題に対応したり、新たな市場を開拓する創業から間もない企業

- 阪神地域は、健康寿命が長く、健康なシニアが多い地域ですが、活躍の場が限られています。また、2021年のジェンダーギャップ指数で日本は156か国中120位と先進国の中でも最低レベルとなっています。
- 2021年4月、阪神間7市1町は「パートナーシップ宣誓制度」に関する協定を結び、性的少数者のカップルが公営住宅の入居や新婚世帯向けの補助などの行政サービスなどが受けられるようになりました。

課題

●シニア、女性が活躍できていない、また、少数派の方への理解が不足している

- ・ 高齢者人口の割合が高く、地域活動の担い手が減少している
- ・ 定年後のシニアが多数地域にいるが、意欲あるシニアの能力が地域づくりに繋がっていない
- ・ 男性の育児参加が進まず、性別役割分担意識が解消していない
- ・ 阪神間市町に女性市長が数多くいる一方で、意思決定過程への女性の参画は低い水準にあり、女性リーダーの登用が進まない
- ・ 障害福祉サービス事業所を利用する障がい者の平均月額工賃が全国に比べ低額となっている
- ・ 性的少数者への理解が不足している



地域でのイベント

将来への取組

●あらゆる人々がライフステージに応じた多様な生き方が選択・実現できる機会をつくる

- ・ シニアが、老人クラブのほかに生きがいや健康づくりなどの場を創出できるようにする
- ・ 男女ともに仕事と子育てを両立できる環境を整備し、家庭や地域生活で人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会を目指す
- ・ ジェンダーギャップのない、誰もが参画しやすい制度づくりに努める
- ・ 障がい者にとって就労の場が多様になるよう、障害福祉サービス事業所の授産商品の販路拡大や農福連携に取り組む
- ・ SOGIE ハラスメントの防止に取り組む

【地域コミュニティの声】

- ・ 地域活動を手伝いたいけどどこに行けばいいかわからない人がいる。常設の場にふらっと立ち寄り、コーヒーを飲んで話ができると、住民の「やりたい気持ち」や「やるべきこと」を拾うことができる。

- 人種や性別といった表面的なものだけではなく、価値観や考え方などに重点をおく「ダイバーシティ(多様性)」は、アメリカで始まったと言われています。日本でも、多様性を受け入れて活かすという「ダイバーシティ&インクルージョン」という考え方が浸透してきました。企業にも働き手にもメリットがあるこの考え方は、今後、より多くの企業で取り組みが進み、実践されることが期待されています。

| | |
|---|--|
| L | 女性の同性愛者(レズビアン) |
| G | 男性の同性愛者(ゲイ) |
| B | 同性愛者(バイセクシャル) |
| T | こころとからだの性の不一致(トランスジェンダー) |
| Q | こころの性別、恋愛の方向性が定まっていなかったり、その変化している途中であるなどの人(クエスチョニング) |
| + | 上記以外にもたくさんの性のあり方があることから、包括的な意味を持たせるもの。 |

2030年頃の間像

- 誰もがありのままの自分を受け入れられ、望むような活動・自己実現ができるようになっていく

- ・ 個人の生きがい・職務経験と地域のニーズとのマッチングが容易になり、コミュニティビジネスやソーシャルビジネスが盛んになっている
- ・ 女性の管理職比率が向上し、多様な分野でリーダーになる人が増えている
- ・ 障がい者が自己実現できる社会になっている
- ・ SOGIE に対する理解が深まり、身近な人が性的少数者であることを受け入れることが自然になっている

【地域コミュニティの声】

- ・ 人口減少は税収の低減になり、年間一括交付金での活動には限界がくる危機感を持っている。そのために各地域がある程度収益性を図り、活動を支え、かつ元気な高齢者にも活動の場を提供できることが必要と考える。
- ・ 「まちづくり委員会」は5年前から事業収入を得る活動を行っており、更に拡大するため、NPO 法人化した。

※SOGIE 「性的マイノリティ」の総称の一つ
SO:性的指向、GI:性自認、GE:性表現

2050年にめざしたい姿

- 誰もが地域や企業で能力を発揮し、障がい者なども住みやすい社会になっている

- ・ 元気なシニアや女性が地域コミュニティのみならず、企業でも能力を発揮している
- ・ 社会や企業などあらゆる組織や活動においてジェンダーによる平等が実現されている
- ・ 多様な働き方の実現で、障がい者や性的少数者などが、自分らしいスタイルを実現し、公正な処遇が確保されている
- ・ 多様な人々にとって暮らしやすい地域であることが、地域外にも知られるようになっている



尼崎臨海地域

※ダイバーシティ&インクルージョン

社会において多様な人材の活躍を推進するための概念で、国籍や性別、障がい、性自認や性的指向、言語など人それぞれの違いを受け入れて尊重すること

- 阪神地域には産業が盛んなエリアもあり、出稼ぎ労働者を受け入れてきた地域ですが、近年は、技能実習等のため地域で暮らす外国人も増えてきています。
- しかし、言葉の壁や生活習慣の違いにより、日本で生活するために必要な情報が外国人に伝わらず、地域住民からすると、日本になじもうとはしないという印象になる場合もあります。
- 異なる文化を理解し、同じ阪神地域住民として敬意を払う多文化共生社会の実現と誰もがコミュニティでいきいきと暮らせる社会の実現が望まれます。

課 題

●外国人が増加しているが、日本人との交流が不足しており、必要な情報が伝わらない

- ・ 東南アジア、南米等世界各国から技能実習や留学など観光以外の目的で一定期間を日本で暮らす人が増加しているが、受け入れ体制が十分でない
- ・ 日本人自身が、外国の生活や文化などについて理解不足である
- ・ 自分と異なる文化の人との積極的な交流が難しい
- ・ 外国人にとって日本語の習得が困難で、子どもの学校や地域とのコミュニケーションが少ない
- ・ 外国人にとって地域での生活に必要な情報が伝わらない



阪神なぎさ回廊

将 来 へ の 取 組

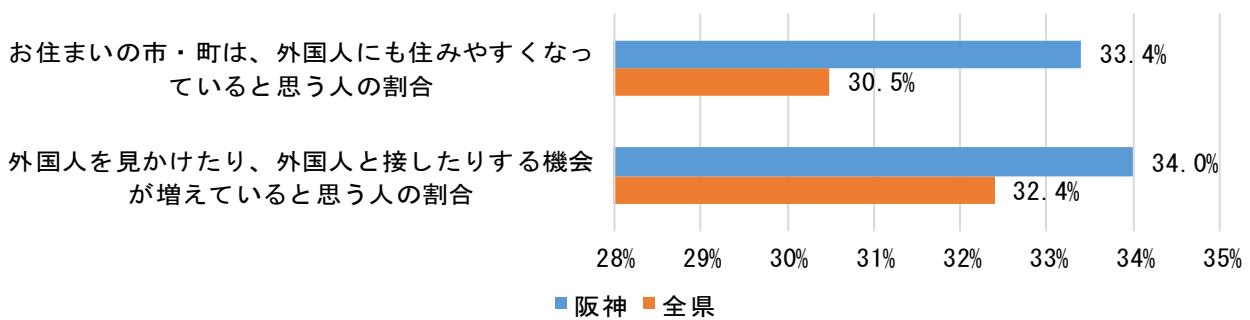
●地域に暮らす人々が、日本や外国の文化を学び、異文化交流をすすめる

- ・ 異文化を持ち合わせた外国人であるからこそ持っている感性やスキルなどを活かし活動の場を広げる
- ・ 日本人と外国人の居住者それぞれが相互の生活習慣や文化を知る機会を持てるようにする
- ・ 教育、意識啓発、交流事業によって地域に多くの文化的背景を持つ人々がいるということに対する理解を深める
- ・ 日本語教育を進めるだけでなく、母国語能力が不十分な外国人児童や生徒に母国語教育を実施する
- ・ より多くの情報が多言語で得られるようにする

【外国人の声】

- ・ 他言語の表示があるが、英語を選択すると、情報量が日本語表示の半分くらいになってしまう
- ・ 日本人はほかの国のことをあまり知らない。アメリカにしか興味が無い。私がスペインのことを話していても、興味がなさそうで寂しい。
- ・ 日本にいて困ったことはあまりないが、母は日本語が分からないので、全部通訳している。

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

● 多様性を受け入れることで、日本と外国それぞれの良さを活かした取組が生まれる

- ・異文化の人々も地域に溶け込んだ生活を送ることができるようになる
- ・外国人は専ら支援を受ける側ではなく、主体的に地域コミュニティに参画するようになる
- ・自動翻訳で会話での言語問題はほぼ解決している
- ・多様な人種の人々が言語の不自由なく暮らすことが自然になっている



尼崎北堀運河

2050年にめざしたい姿

● あらゆる人々がお互いに尊重しながら共生し、新しい価値観や文化が生まれている

- ・国籍や人種などに関わらず、それぞれの個性や文化的背景を尊重し、多様性を受け入れることができている
- ・様々な場面で外国人の意見が取り入れられ、新しい価値観や文化を育む
- ・外国人もコミュニティの一員として生き生きと活動している
- ・様々なコミュニティにおいて、外国人が参加することが当たり前のこととして受け入れられている

【国際交流団体の声】

- ・外国人を支援対象として扱うばかりでは外国人の自己肯定感が低下するので、社会参画を促し、自身も社会の構成員の一員であると意識づける必要性がある。
- ・外国人県民とは対等に接する。まちづくりに関しても、外国人県民の出身地での知見など、学ぶことが多い。外国人県民には、日本人にはないスキルを持っている人が多い。
- ・まちづくり分野でもチャリティ活動などは外国人県民の方が、日本人よりも上手である。

未来まで続く花と緑と里山

- 阪神地域には、武庫川や夙川沿いの桜や、甲山森林公園などの都市近郊で花と緑を楽しめる魅力的な場所が数多くあり、良好な景観や環境を保全していく必要があります。
- 北摂地域には歴史・文化や生物多様性などを保つ里山が数多く、持続的な保全を図り、活性化につなげるため、「北摂里山博物館（地域まるごとミュージアム）構想」を推進してきました。しかし、近年少子高齢化による担い手不足、空き家や空き地の増加による環境の悪化などが自然環境保全活動に影響を与えており、自然環境や里山の保全に関わる人を増やす必要があります。

課題

●里山保全にかかる担い手の不足により、継承が困難になっている

- ・里山を守る活動や取組に参加したい人が増えているが、気軽に参加できる活動が少ない
- ・里山保全の担い手が不足し、里山放置林が増加するとともに、地域住民の減少に伴い空き家や空き地が増加し、鳥獣被害が広がっている
- ・アウトドア活動が人気を集めているが、体験できる機会や場所が少ない

【生産者の声】

- ・茶道で使われる炭（菊炭）を使う人が減り、生産者も減少している。木を切ることが再生に必要なのだが、伐採や煙が出ることに對して移住者の理解が得られない。

【森林の保全活動】

パッチワーク状の景観が残され「日本一の里山」とも賞される北摂の里山の保全を行っています。



将来への取組

●里山のファンやサポーターを獲得、拡大する

- ・「保全」と「再生」が両立する活動に関心が高まり、「行って見て、歩いて、参加し体験する」機会を増やす
- ・地域で活動をしている人たちが里山で文化的な活動や教育、スポーツイベントなどを企画し、交流人口の拡大や里山保全の意義を啓発する機会を教育・学習機関と連携して増やす
- ・緑の散策路、並木道等を整備し、良好な景観を創出するとともに、多世代が集い、交流するプロジェクトを各地域で実施し、清掃や維持管理に気軽に携わることができる仕組みをつくる
- ・地域に住む人々が積極的に里山保全に取り組み、農作物被害をなくすため、ICTを取り入れた鳥獣の捕獲及び利活用を促進する



【ひょうご北摂里山ライド】

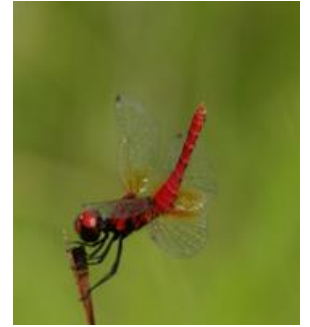
自然豊かな里山などの魅力的な景観や地元特産品等を楽しむサイクルイベントを開催し、交流人口の拡大や地域の活性化につなげます。

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査（阪神北県民局独自調査）

あなたは、森林ボランティアなど「北摂の里山」を守る活動や活動を支援する取り組みに参加したいと思いますか。

| 区分 | H29 | H30 | R1 | R2 | R3 |
|-------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1) 里山活動への意欲 (回答1及び2) | 16.4% | 12.1% | 16.3% | 16.0% | 20.5% |

「北摂の里山」を守る活動に「すでに参加している」、「今後参加したいと思う」と回答した者は、近年16%前後で推移しているが、20.5%に増加した。



阪神地域のハッチョウトンボ

2030年頃の間想像

● 阪神地域の自然に人気が出て、自然を守る担い手が集まる

- ・ 里山への意識が高まり保全活動が広がることで、伐採体験や木々の加工などが人気の活動になる
- ・ 里山や森林保全に特化したボランティア団体や有識者などの専門家が各地でアウトドアビジネスと連携し、担い手が増える
- ・ 空き家や空き地、オープンスペースなどを活用し利用につなげ、アウトドアビジネスが拡大する
- ・ 花や緑の周遊散策路が整備され、人が集まり、景観を守るボランティアコミュニティができる
- ・ ジビエ料理を目当てに観光客が訪れるようになる



い〜な！！さくら通り（猪名川町）

2050年にめざしたい姿

● 里山や景観の保全と人々の定住、移住、交流が進む

- ・ 里山地域に住む人が増え、居住地やサードプレイスとしても人気の場所になる
- ・ さまざまな担い手が育ち、里山が美しく保存継承されている
- ・ 都会からのアクセスのよさを活かして、阪神地域の自然を楽しむ人が増加し、アウトドア産業が確立している
- ・ 美しい自然の景観・環境が地域で守られ、花（桜など）・緑の回廊として国内外からも高い人気がある
- ・ ジビエ料理や菊炭、原木椎茸など阪神地域産物がブランドとなり、地域資源を活かしたビジネスが成り立っている



里山の風景

みんなが憩う阪神なぎさ回廊

- 阪神なぎさ回廊は、尼崎、西宮、芦屋の臨海地域の海辺の魅力があふれる遊歩道や親水性の高い護岸などを結ぶ回廊です。
- また尼崎では、海(自然環境)と都市(人工的環境)が接する「なぎさ」を地域のシンボルとして捉え、尼崎 21 世紀の森づくりや尼崎運河再生プロジェクトを地域住民と協働で実施し、自然と都市の再生を図る環境先進都市づくりを進めています。
- 人々の暮らしにゆとりと潤いをもたらす水と緑豊かな自然環境を創出し、みんなが集うレクリエーションの場を目指します。

課題

● 阪神なぎさ回廊の知名度が低く、その魅力を伝える必要がある

- ・ 天然の砂浜の香櫨園浜や御前浜、人口海浜の潮芦屋人口浜、干潟のある甲子園浜など海辺の生物や野鳥を観察できる場所がある
- ・ 西宮砲台や今津灯台など海岸線に特有の歴史的建造物がある
- ・ 環境を学びやすい場や自然が豊かな場所が都市部近くに多くあるが、十分に活用されていない
- ・ 阪神なぎさ回廊を楽しみながら阪神の魅力を感じるウォーキングコースやサイクリングコースが全部で7コースあるが認知度が低い
 - 武庫川・今津コース (7.5 km)
 - 西宮・香櫨園コース (10.5 km)
 - 尼っこリンリン・ロード (6 km)
 - 武庫川・甲子園コース (10.5 km)
 - 香櫨園・芦屋コース (9.5 km)
 - 尼崎コース (11.4 km)
 - 芦屋コース (6.1 km)



西宮ヨットハーバー

将来への取組

● 沿岸部の親水空間を知ってもらう

- ・ 認知度向上のため、行政や市民団体が情報発信やさまざまな交流イベントをすることによって、海岸部の親水空間をPRする
- ・ 阪神なぎさ回廊でのサイクリングやウォーキングに必要な整備を進める
- ・ 小さい子どもから高齢者までの誰もが、自然環境の大切さをいつでも学ぶことができる機会をつくる
- ・ 「尼崎の森中央緑地」ではヨガやミニキャンプのイベントを更に充実させ、「尼崎 21 世紀の森」でもスポーツを楽しみ、スポーツや食のイベントが盛んに行われるようにする

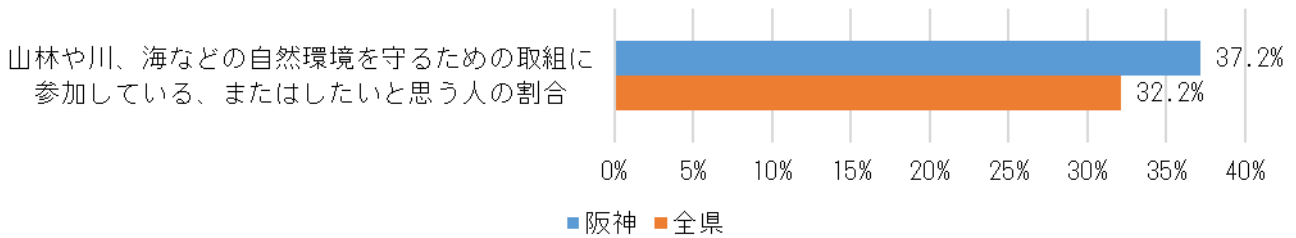
【尼崎の森について考える団体の声】

- ・ 尼崎の運河は、綺麗ではあるが人がいない。オランダの運河では情報がたくさん発信されている。この地域がオランダのようになれば良い。



尼崎 21 世紀の森 環境学習

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

● 阪神の自然環境を活かした魅力のある阪神なぎさ回廊になる

- ・阪神なぎさ回廊が親水空間として認知度が向上し、人々が憩い、楽しめるような場所になる
- ・運河空間と親水空間の活用が進み、多様な場を提供できる運河利用環境（施設）が多くある
- ・阪神地域が環境に優しいまちとして有名になる

【尼崎の森について考える団体の声】

- ・尼崎をベネチアのような住宅街にするという考え方もある。ゴンドラがあったり、家があったり。30年くらいの期間であれば考えることができる。

2050年にめざしたい姿

● 沿岸部の親水空間が人々の憩いの場、レクリエーションの場として賑わう

- ・自然と人間の共生に対する意識が高まる
- ・阪神地域の多世代が集う場となり、交流する活動場所としてにぎわい、生活の一部になっている
- ・阪神なぎさ回廊が地域外の人からも人気になり、憩いの場になる
- ・自然と人と産業との良好な共生関係を築き、持続的な発展が可能な環境先進地域になる

【尼崎 21 世紀の森構想について】



尼崎臨海地域は、重化学工業を中心に、日本の産業経済をリードしてきましたが、近代化の過程においてかけがえのない自然を失うとともに、公害の発生など環境面での課題や、近年の産業構造の変化等による工場等の遊休地が発生していました。

このような状況を踏まえて、尼崎臨海地域を魅力と活力あるまちに再生するため、人々の暮らしにゆとりと潤いをもたらす水と緑豊かな自然環境の創出による環境共生型のまちづくりをめざして、兵庫県では「尼崎 21 世紀の森構想」を平成 14 年 3 月に策定しました。

この構想策定後、この構想に賛同する多くの主体が中心となって森づくり（まちづくり）に取り組み、工場等の遊休地は減少しました。引き続き、貴重な資源である運河や工場の景観など特徴を活かした取組を県民・企業等の参画と協働により進めていきます。

再発見で魅了する「阪神間モダニズム」

- 阪神間モダニズムとは、明治末期から昭和初期にかけて、商都大阪と港町神戸の間に位置する阪神間の鉄道沿線の住宅地開発によって生まれた新たなライフスタイル、芸術文化、価値観などの時代の潮流を指し、当時の独創的な建築物などからその様子をうかがうことができます。
- 阪神間モダニズムこの地域で生まれた特有の文化であり、次世代に引き継いでいくべきものです。しかし認知度が低いままでは時間の経過とともに維持が困難となります。そのため、コーディネーターなど専門的な人材を育成したり関連する地域資源をまちづくりに活かしたりして、阪神間モダニズムの保存、継承を目指します。

課題

● 阪神間モダニズムの認知度が低く、その魅力を伝える必要がある

- ・ 阪神間モダニズムについて阪神間ではあまり知られていない
- ・ 阪神間モダニズムの作品は、建築・文学・芸術など多岐にわたる（作品例）
 建築・・・尼崎市開明庁舎、武庫大橋、関西学院大学、ヨドコウ迎賓館、神戸女学院、甲子園会館、宝塚文化創造館、旧平賀家住宅
 文学・・・谷崎潤一郎「細雪」
 音楽・・・貴志康一（バイオリン）
 美術・・・小出楯重
- ・ 象徴となる建築物などは管理と維持費用がかかるため、継承や保存が難しい



あにあんフォトコンテスト 2020 阪神間モダニズム賞
 「夕照の武庫大橋」（尼崎市・尼崎市側からの武庫大橋）
 玉井勝典さん

将来への取組

● 幅広い人に阪神間モダニズムを知ってもらう

- ・ 大学や行政、NPOなどが、大学、美術館、博物館、公共教育機関を活かした阪神間モダニズムについての学びの場をつくる
- ・ 行政などが子どもから大人まで幅広い世代の認知を拡大するため、イベントを行う
- ・ 阪神間モダニズム（建築など）を保存、継承するため、広報を積極的に行うとともに、XR技術のコンテンツを作成し、オフライン・オンラインを問わない阪神間モダニズム巡りを推進する

【文化団体の方の声】

- ・ 阪神間モダニズムの影響を受けた風光明媚な場所での文化発表は魅力のひとつ。
 京都、奈良等の歴史ある街に近いことから伝統的な文化に対する興味は人々の中に宿っている部分もあると思う。

【文化団体の方の声】

- ・ 阪神地域は「阪神間モダニズム」に見られるように、古くから文化芸術を大切にしてきた風土と歴史があり、多くの芸術家が在住、活躍する。



武庫川女子大学甲子園会館
(旧 甲子園ホテル)



あにあんフォトコンテスト 2017 金賞
「芦屋川桜模様」 高橋一吉さん



日本初の都市間電気鉄道として
開業した阪神電鉄

2030 年頃の間像

●阪神間モダニズムに関心が深まる

- ・ 大学や美術館などで学んだ人たちからプロデューサーやコーディネーターなど、専門的な人材が育ち、建築物の保存、継承への活動にも積極的に取り組んでいる
- ・ XR 等の技術を活かして阪神間モダニズムの歴史や文化が多くの人に知られ、阪神間モダニズムのファンが地域内外に増える
- ・ 阪神間モダニズムを知ることで、住民や関わる人が地域に愛着を持ち、地域プライドが高くなる

2050 年にめざしたい姿

●阪神間モダニズムに関する取組が発展し、継承される仕組みができている

- ・ プロデューサーやコーディネーターが阪神間モダニズムを楽しむツアーを開催し人気になる
- ・ XR などの先端技術が柔軟に活用され、いつでも人が集まり、楽しむしかけが広がっている
- ・ 古いものを大切にしながら、新しい考え方、文化や AI (人工知能) などの技術を受け入れて発展させ、阪神地域の文化や景観を継承している
- ・ 阪神間モダニズムの継承が実現し、新たな地域づくりやまちづくりに活かされている

※XR VR(仮想現実)、AR(拡張現実)、MR(複合現実)などの先端技術の総称



甲子園住宅経営地鳥瞰図/昭和 5 年(1930)

甲子園エリア、娯楽・スポーツ施設、学校、病院などが充実したガーデンシティの先駆けとして開発された。

提供: 阪神電気鉄道株式会社(社史より)

生涯の学びと次世代につなぐ阪神文化

- 「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査では、住んでいる地域のことに関心がある人の割合が、県内の他地域と比べ高い割合となっています。
- 阪神地域は特色のある博物館、美術館やホール、スポーツ施設もあり、地域と一体となった芸術活動や、スポーツ活動が展開されています。地域には公民館も多数あり、地域住民のつどいの場を形成するだけでなく、地域のことを学ぶ場としても提供されています。
- これら身近にある施設で、学んだ人が専門的な人材となって、阪神地域の生涯学習をさらに発展させていくなど、阪神文化の継承に取り組みます。

課 題

● 伝統や継承文化についての認知が希薄で、その魅力を伝える必要がある

- ・ 子どもは社会との接点が限られており、体験学習やイベントなど多世代交流の機会が少ない
- ・ 地域の歴史文化をはじめ、地域資源を知る機会が少ない中で、地域の施設で多数の学習講座があるものの、多くの人々が学び直しをできていない
- ・ 学び直しが趣味の範疇に収まらず、学びから地域活動につながる人材育成が必要である
- ・ 学校教育、家庭教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味による活動など、生涯学習の重要性が高まっている

【みんなの声】

- ・ 子どものころの体験は地域への愛着にもつながるため、歴史文化をはじめ地域のことを知る機会が必要である。



多世代交流による文化学習

将 来 へ の 取 組

● 学びの機会をつくり、専門的な人材を育てる

- ・ 乳幼児期からの生活体験や小中学校の授業等で地域文化に触れる機会を増やす
- ・ 尼崎城、酒蔵産業、食品産業、西宮神社、上島鬼貫、三田藩（九鬼家）など、地域の歴史について、各地で勉強会や体験学習を開催し、地元の魅力を発信する
- ・ 学校、大学（学生）、美術館や博物館、公民館、NPOなどの地域団体が地域と一緒にワークショップを開催し、ファシリテーターなど、学びをつないでいく人材を育成する

【学生起業家の声】

- ・ 中学生や高校生でも「地域でこんなことができる」「何かしてみよう」「起業してもいい」と思える機会や、学びのためであれば何をしてもいいという場所があればいい。自分でプロジェクトをやってみる機会を多く与える事が大切だと思う。

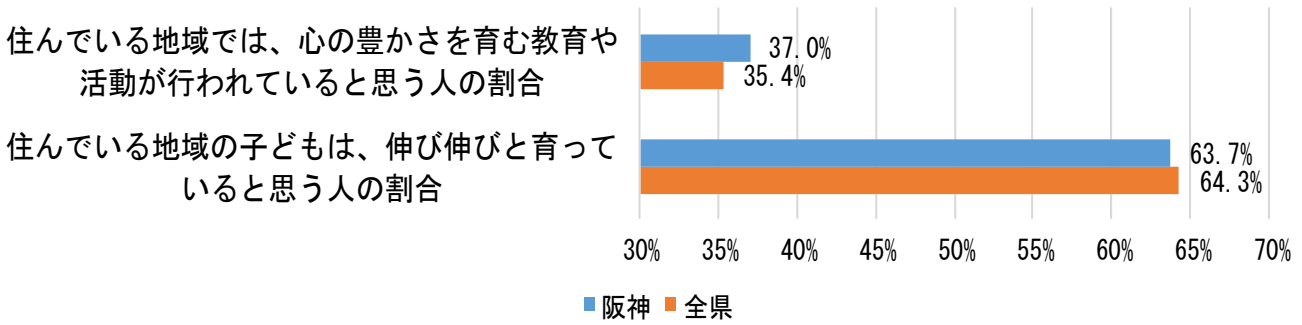
※上島鬼貫

「東の芭蕉・西の鬼貫」といわれた江戸時代の俳人

※九鬼家

南北朝時代から江戸末期まで活躍した一族。志摩国（三重県）の大名で水軍が有名

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間画像

●地域を知ることや興味のあることなど、学びを深めることに関心が高まる

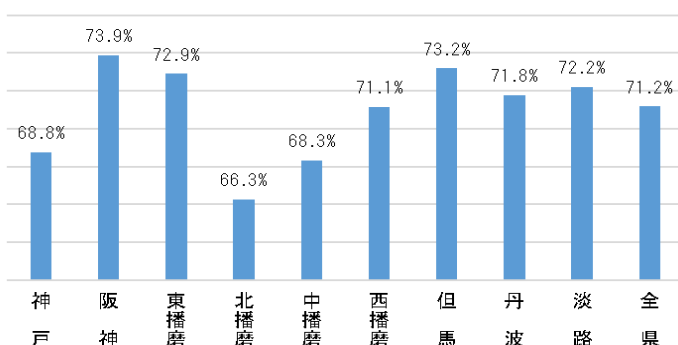
- ・地域に住む人の阪神地域の歴史や文化への認知度が向上し、地域プライドが醸成される
- ・子どもをはじめ、誰もが専門家による地域を学び知る機会・講座が充実し、関心や意欲が高まる
- ・地域の人々がいつでも、自由に学習機会を選択し学ぶことができ、その成果が地域や社会から評価されるようになる

【みんなの声】

- ・「やりたい気持ち」や「やるべきこと」を拾い上げる場所には、面白い発想がうまれると思う。
- ・オンライン化が進むからこそ、情操教育に力を入れてほしい。アナログな部分も大切である。

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査

住んでいる地域のことに関心がある人の割合



2050年にめざしたい姿

●地域資源を学び、さらなる発展をしながら阪神地域の文化を継承している

- ・地域の自然や文化の原体験を多く得た子どもが地元へ愛着を持ち、積極的に地域のことを学ぶようになり、次世代へつながる
- ・豊かな地域資源の中で幼児からシニア層までライフスタイルに応じた様々な学びの機会があり、地域をつくる原動力につながっている
- ・自然、歴史、文化を活かし、阪神地域ならではの新しい産業や観光資源を生み出している
- ・古いものを大切にし、新しい考え方やXRなどの技術を使いながら、阪神地域の文化を継承している



【阪神地域オープンミュージアム無料開放DAY】

世代を超えてつながるまち

- かつて西宮市、宝塚市、川西市、三田市、猪名川町において開発されたニュータウンは、年々高齢化が進み、農村周辺部とともに、若い世代の転出や公共交通機関問題などの対応が必要になっています。
- シェアリングカー、小型モビリティの発達や完全自動運転などの実現や普及により、世代に関係なく住みやすいまちをつくります。また、若い世代と経験豊富な高齢者世代が交流し、高齢者世代からの子育てのサポートやアドバイスで若い世代の不安が解消する、世代を超えてつながるまちを目指します。

課題

●高齢化にともない、オールドタウン化が進んでいる

- ・成熟したニュータウンや農村部からは若者層の流出が続き、高齢化が進んでいる
- ・子どもの数が減り、子育て世代を対象とした便利施設が少なくなるなど、子育てのしにくいまち、若者にとって魅力に欠けるまちになりつつある地域がある
- ・公共交通機関の路線や便数の減少など、エリア内外を結ぶ公共交通機関の確保が困難になりつつある
- ・発達している公共交通機関と利用者低迷による維持困難な地域が存在し、移動手段の格差が発生、高齢者や障害者の買物や通勤が不便な地域がある

【運輸業者の声】

- ・高齢者の社会参画、労働参加の必要性が高まっているため、移動手段の確保が課題である。
- ・ラストマイル問題（バス停から自宅までの移動手段がないこと）の発生や学校統廃合に伴う通学手段の確保も課題である。

将来への取組

●まちの活性化と、周辺地域の魅力向上に取り組む

- ・空き家や公営住宅の状況を把握し利用につなげたり、リノベーションにより魅力を向上させる
- ・行政は若者世代やファミリー層の住宅確保について積極的に支援する
- ・子育て世代が住みたくするような情報交換の“場”を、コーディネートする人材を育成し、内容を充実させる
- ・農村部では、身近にある豊かな自然を活かし、様々な店舗やレジャーを展開させるなど、都市周辺のエリアも含めた魅力向上に取り組む
- ・高齢者や農産物を遠くまで運べない生産者の商品を販売所等まで路線バスで運搬する「貨客混載」など、新たなニーズを掘り起こし、まちと農村部をつなぐ路線の維持と利便性向上に取り組む

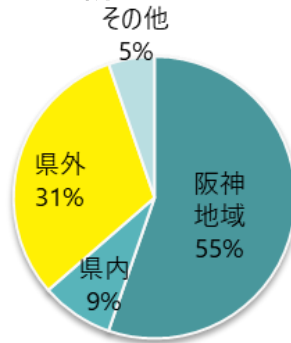


地域でのイベント

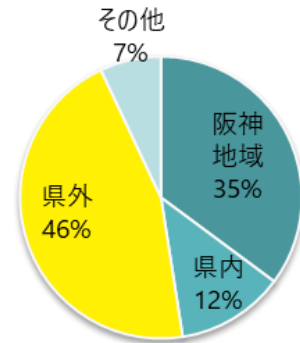
※MaaS(Mobility as a Service: 通称マース)
交通手段をまとめてより便利な移動を実現する仕組み

阪神地域管内の高校生と大学生へのアンケート調査

30年後、
暮らしたい場所、
働きたい場所は
どこですか。



【暮らしたい場所】



【働きたい場所】

2030年頃の間画像

●世代を超えたつながりができる

- ・落ち着いた住環境で子育てをしようとする若い世帯が増えている
- ・先輩世代から育児のアドバイスをもらえる“場”ができ、世代を越えた地域の交流が深まる
- ・ニュータウンの周辺部でグランピングなどの新しい郊外型レジャーの人気の高まっている
- ・MaaSの機能を活用したデマンド交通の実証実験や自動運転の公道走行実験など次世代モビリティ導入に向けた取組が行われている

【運輸事業者の声】

- ・MM（モビリティマネジメント）活動として、高齢者、学童を対象に安全教室を開催し、バスの死角などを知ってもらい事故防止に努め、あわせて利用促進活動も行い将来の公共交通利用者の創出に繋げている。



多世代交流による地域学習

2050年にめざしたい姿

●ゆとりがある、成長できる環境で誰もが望む暮らしができる

- ・賃貸住宅も含めて移住しやすい環境が整い、様々な世代の住民が暮らしている
- ・子どもたちと高齢者の交流が生まれている
- ・地域で気軽に集まれる場所やコミュニティができており、シングルでも参加できるコミュニティなど、様々な住民がゆとりを持ってコミュニティに参加している
- ・住民自らができるサービスを提供するなど住民同士の交流が盛んになり、新たなビジネスも生まれている
- ・農村部では農業以外にも様々な事業が行われており、様々な年代の多様な人々が暮らしている
- ・都市と自然がどちらも身近である環境を活かして、様々なレジャーを楽しんでいる
- ・各地に移動拠点の設置や幅広い世代を対象にしたモビリティ、自動運転の普及が進み、高齢者、障害者が快適に移動できたり、きめ細かな物流網がつくられたりしている

自分にあつた“つながり”に参加できるまち

- 現代社会では、個々人のライフスタイルの変化や多様化、高齢者の一人暮らしの増加により、人と人との触れ合いの機会や関係が希薄になっています。
- 年齢や性別、活動時間などに関係なく、支え合うつながりが構築され、助けがほしい人と助けたい人がつながることができる誰もが住み続けたいようなまちを目指します。

課題

● 地域と個人のつながりが希薄になっている

- ・ 学校や会社以外でつながりの作り方がわからず、人と人とのつながりが希薄になっている
- ・ 子どもの数の減少や独居老人の増加など、孤独な人が増えている
- ・ 手助けを求めたり、悩みを相談できるような人が地域にいない
- ・ ライフスタイルや嗜好の多様化に伴い、これまでのような密度の濃いつながりだけではニーズに合わなくなっている
- ・ 既存のコミュニティに参加することに高いハードルを感じ、気軽に参加できるコミュニティがない
- ・ コミュニティを探すツールの有無も分からず探すのが大変である。特に転入者にとっては、どのようなコミュニティがあるのか分かりにくく、参加することが難しい。



イベントへの参加

将来への取組

● 様々なつながり方でつながるきっかけや仕組みをつくり、NPO等が支援する

- ・ キャンプやバーベキューなど、地域主体の一体感を醸成するイベント等を行い、地域の人々がふれあう機会をつくる
- ・ 登下校のあいさつや見守りパトロールなどにシニア世代が関わるなど、様々な世代がふれあう仕組みをつくる
- ・ 手助けがほしい人と手助けをしたい人を地域のなかでつなげたり、悩みを地域で相談できるような仕組みをつくる
- ・ 既存のコミュニティの情報をオープンにして、コミュニティがあることを分かりやすくするとともに、コミュニティ側からも声を掛けるなど参加しやすくする
- ・ マッチングアプリなどの気軽に話したり、悩み相談などができるツールの利用を広げる
- ・ NPO は資源の発掘や課題を掘り下げ、専門分野の活動を基礎として、地域活動を支援する

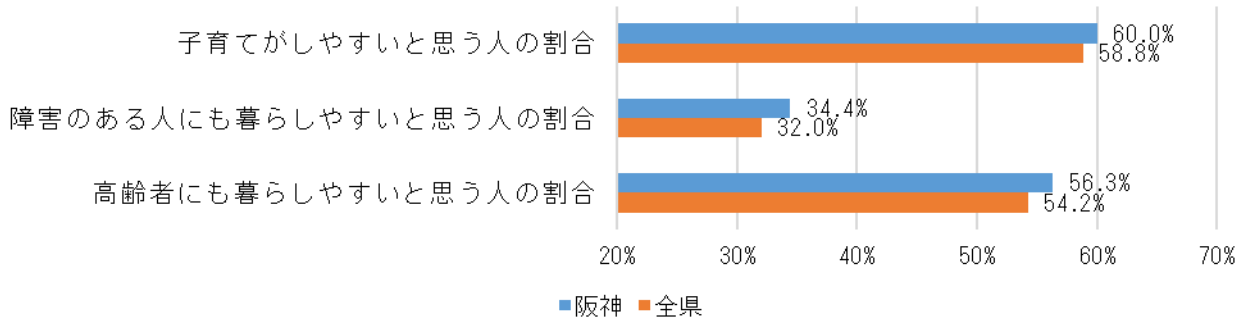
【県民からの意見】

- ・ 今後どんなにIT技術が発達しても、大事な価値は、「人間の温かみ」だと思う。

※マッチングアプリ

年齢、性別などに関係なく、何かのテーマでつながることができるアプリ

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

● つながることの良さが再認識され、様々なつながり方ができるようになっている

- ・ 登下校のあいさつ運動などで地域の治安が維持されるなど、日常のつながりが重要であることを再認識されるようになる
- ・ 年齢、障害の有無にかかわらず、つながりが構築され、助けがほしい人と助けたい人がつながる。
- ・ 内容やつながる密度など望むようなコミュニティを簡単に見つけられ、簡単に参加できるようになっている
- ・ 日常的なマッチングアプリの利用が見られ、アプリを通じて様々なコミュニティが形成される



多世代交流による地域清掃

2050年にめざしたい姿

● 自分にあった“つながり”に参加できるまちを実現する

- ・ 地域の人が、子育て世代、高齢者、障害者といった地域の人に関心を持つようになり、手助けを求められたら、さりげなく手助けをすることが当たり前になっている
- ・ オンライン、オフラインを問わず、意思疎通が可能となり、地域で安否が確認できるようになると、認知症のある方や高齢者、障害者の方も住みやすいユニバーサル社会へとつながっていく
- ・ 年齢、性別、趣味、嗜好以外でも自分にあったつながりを持つことができる
- ・ 人々が地域に愛着を持ち、住み続けたいと思うようになる

【地域デザインを考えるワークショップでの意見】

- ・ IT活用で気軽に情報交換や相談ができるバーチャル家族のしくみや、困っている人と地域をつなぐマッチングアプリで支え合うしくみがあれば、共通の趣味や同じ目標を持ったコミュニティに身を置くことで個々の成長につながる可能性がある。
- ・ 現実の家族には相談できない悩みを相談できるような憩いの場所を作ったり、特性を登録し、その情報からAIが参加者の興味関心や専門分野などを元にマッチングを行うことで、解決を図る。

地域で循環するエネルギー

- 近年、気候変動に伴う風水害等が増加し、大規模停電等ライフラインの寸断が多発しています。将来的に気候変動による影響がさらに拡大する可能性が高く、災害の多発が予想されます。災害に対応するためにも強靱で持続可能な地域づくりにつなげていく視点も重要です。
- 北摂里山の木質バイオマス資源、ソーラーシェアリングなど阪神地域の資源を活用した再生可能エネルギーの地産地消により、エネルギーを地域内で循環させることで経済循環、新たな雇用を創出し、自立した地域づくりにつなげます。

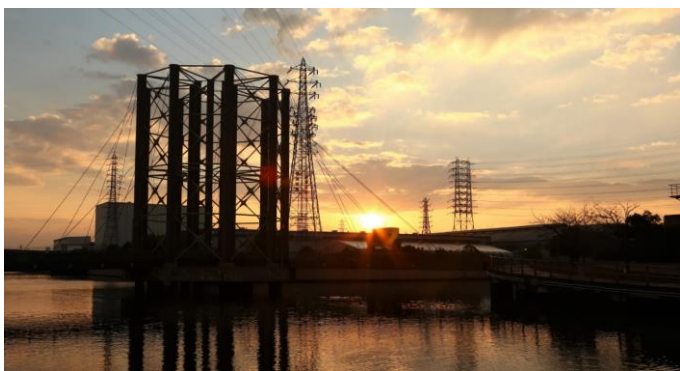
課題

●脱炭素社会に向けての意識の高まり

- ・省エネ意識やCO₂排出の少ないライフスタイル、脱炭素社会（プラスチックごみの削減等）への転換が進んでいる
- ・ヒートアイランド現象により、阪神南地域の都市部は、阪神地域の他地域に比べて気温が高い
- ・気候変動の影響による局地的な豪雨、台風による風水害（高潮等）多発している

【みんなの声】

- ・国道43号線の排気ガスが気になっている。
- ・低炭素化を進めるため、水素やアンモニアを使ったエンジンを開発している。もっと多くの人に脱炭素について関心を持ってほしい。



尼崎北堀運河

将来への取組

●太陽光発電、小水力発電、バイオマス発電など再生可能エネルギーの導入拡大

- ・ため池を有効活用した太陽光発電の導入に向けた研究を推進する
- ・地域団体が小水力発電の事業化に向けて調査や勉強会を実施する
- ・再生可能エネルギーを利用した未利用間伐材や広葉樹など木質バイオマス資源を有効利用する
- ・再生可能エネルギー導入に関するワークショップを開催する
- ・CO₂吸収源としての森林・里山保全のため、小学生を対象とした里山体験学習を実施する

【みんなの声】

- ・阪神地域が脱炭素の先進地として有名になってほしい
- ・森の間伐資材を有効利用したい
- ・環境に優しく、阪神地域らしい緑、景色があるまちをめざしたい
- ・公園がもっと増えると緑も増えやすいのではないかな。

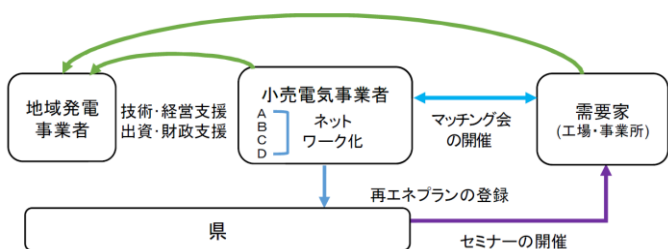


2030年頃の間画像

● 地域循環共生圏のモデル事業の実施など脱炭素の取組が軌道に乗り始める

- ・ 農業生産と発電を同時に行うソーラーシェアリングが普及し始めている
- ・ 小水力発電や小規模バイオマス（木質バイオマス）ボイラーにより生じる熱を有効利用した地域循環共生圏のモデル事業が実施されている
- ・ 県内の再生可能エネルギー由来の電力を県内事業者へ提供する「ひょうご版再エネ100」が展開されている

ひょうご版再エネ100



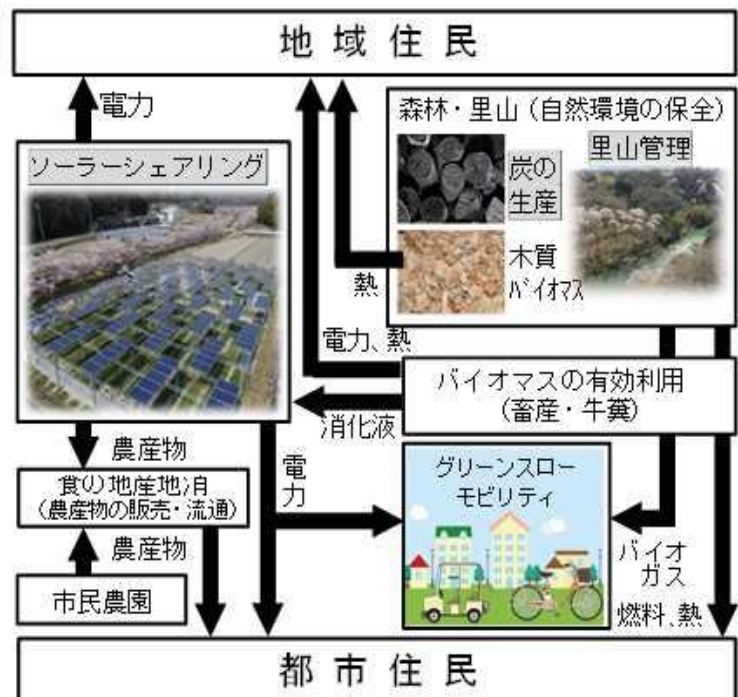
【みんなの声】

- ・ クリーン&デジタルが進めばもっと住みやすいまちになる

2050年にめざしたい姿

● エネルギーを地域内で循環させ、脱炭素が進む

- ・ エネルギーを地域内で自給することで地域経済の循環を生み出し、地域が自立している
- ・ 阪神地域の自然的要因や市街地の人工排熱、風通し等の人為的要因を含めた特性を把握したまちづくりが進められている
- ・ 低炭素なバス、シェアリングカー、小型モビリティなど、環境にやさしく多様な移動手段が整っている



地域循環共生圏のイメージ

- 阪神地域は兵庫県の中でも都市化が高度に進んだ地域ですが、古くから氾濫を繰り返してきた武庫川などの河川や沿岸部に海拔ゼロメートル地帯があるなど、一度災害が発生すると甚大な被害が発生するおそれのある地域でもあります。
- これらの災害に対する備えは、長年にわたって取り組んできましたが、近年、県下の様々な地域が災害に見舞われており、阪神地域においても平成30年台風第21号による高潮災害が発生しました。
- ハード対策は進められていますが、住民は想定を上回る事態に備える必要があります。

課 題

● 甚大な災害が発生するリスクが高まっている

- ・ 今後30年以内に70～80%の確率で南海トラフ巨大地震が発生すると予測されており、津波被害の発生が懸念されている
- ・ 温暖化の進行とともに、大雨が増加、線状降水帯など雨の降り方も変わってきており、水害が激甚化傾向にある
- ・ 台風に伴う大雨や暴風、局地的に集中する大雨により、河川氾濫や土砂災害、高潮被害の危機が高まっている
- ・ 国土強靱化により河川対策や津波対策、高潮対策のため防潮堤の整備などのハード対策を進めているものの、ハード対策の想定を上回る災害が発生するおそれもあるため、避難等のソフト対策が求められている
- ・ ハザードマップにより居住地や勤務地エリアの危険箇所を常日頃から把握するなど一人ひとりの防災力を高める必要がある



災害時の消火訓練

将 来 へ の 取 組

● 防災訓練、要配慮者への個別避難計画などのソフト対策を行政と住民が一体となって充実させる

- ・ 行政は、ハード対策を進めるとともに、どのような災害リスクがあるのかを住民に知ってもらう
- ・ 災害が他人事にならないよう、保育施設、学校での防災教育を充実させる
- ・ 要配慮者や避難行動要支援者について、特徴に応じた個別避難計画の作成など、避難行動の支援体制を整備する
- ・ 要配慮者、外国人居住者も含めた住民は、災害時に確実に避難できるように、防災訓練にも積極的に取り組むなど一人ひとりが普段から備える
- ・ あらゆる災害情報や避難情報の多言語化を進めるとともに、外国人居住者も防災訓練に参加できるよう、外国人を支援する団体と連携する

【防災士の声】

- ・ 住民の自発的活動を増やす取組や、将来の担い手である児童、生徒、学生との連携が必要である。

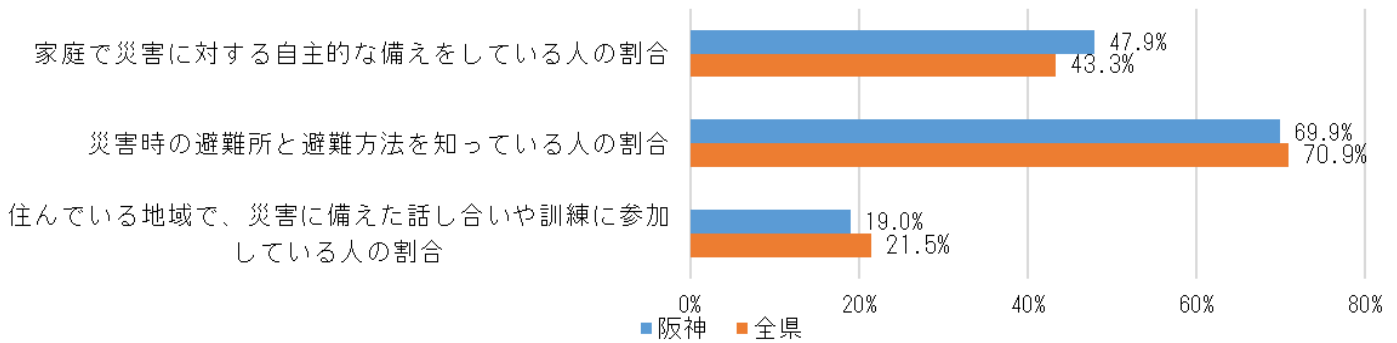
※要配慮者

高齢者、障害者、乳幼児その他特に配慮を必要とする人

※避難行動要支援者

要配慮者のうち、災害時に円滑な避難の確保を図るため特に支援を要する人

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

● 災害に対するハード対策が進み、ソフト対策が整ってくる

- ・各地域における災害リスクに応じ、ハード対策だけでなくソフト対策も含めた総合的な対策が進む
- ・個別支援計画に基づいた災害弱者を地域で助けて避難できるしくみができている
- ・日頃から、災害弱者の方、小さな子どものいる家族、外国人居住者などへの目配り、気配りができる“おせっかいがおせっかいでない”コミュニティができている

【防災士の声】

- ・市民一人ひとりに対して、危機意識を持ってもらえるような啓発活動を行い、災害弱者自身が行動できるような支援を増やす。その対応として交流が増える施策が極めて大事である。
- ・ベトナムの留学生、実習生を2年前から受け入れ、地域の防災活動に参加している。



図上想定訓練

2050年にめざしたい姿

● 誰一人取り残さない避難行動ができる

- ・ハード整備で一定規模の災害を防ぐとともに、関係機関の連携協力やコミュニティでの助け合いにより全住民が避難ができて、災害が発生しても人命が守られるようになっている

【留学生を受入れている方や防災士の声】

- ・人間らしい生活なしでは、充実した生活はできない。地域コミュニティの交流を増やす策を構築し、お互い様の社会を作ることが重要で、災害対応を考えれば、被災が想定される地域との支援・連携に目を向ける事も必要である。

【阪神地域の学校に通う学生アンケート

- (「30年後の阪神地域の理想の姿」の項目)
- ・南海トラフの対策をし、乗り越えて新たな世代との繋がりを強め、にぎわいのある地域



地震体験

- 誰もが住み慣れた地域で、自分らしく安心して暮らせる社会の実現を望んでいます。
- しかし、少子高齢化により、団塊の世代すべてが2025年に75歳以上の後期高齢者になる社会が迫っています。
- 医療、介護、予防の仕組みを構築し、高齢者の持てる力を発揮しながら生活を継続できる支援や見守りで、いきいき健康100年人生を目指します。

課 題

● 高齢化の進行に伴い、認知症やフレイルに対する理解が必要である

- ・ 高齢者人口が増加し、全人口に占める割合が高くなり、医療や介護の専門職の連携が必要である
- ・ 認知症の人や高齢者が可能な限り住み慣れた地域で自立した日常生活が送れるよう、在宅サービスの内容や量を充実させ、「地域包括ケアシステム」の構築に向けた取り組みを推進する方策が展開されつつあるが、十分ではない。
- ・ フレイル（加齢による心身の虚弱化）予防の取組の着手段階にある
- ・ 体力や年齢に応じて気軽に楽しむことができる生涯スポーツを普及させる必要がある



尼崎 21世紀の森

将 来 へ の 取 組

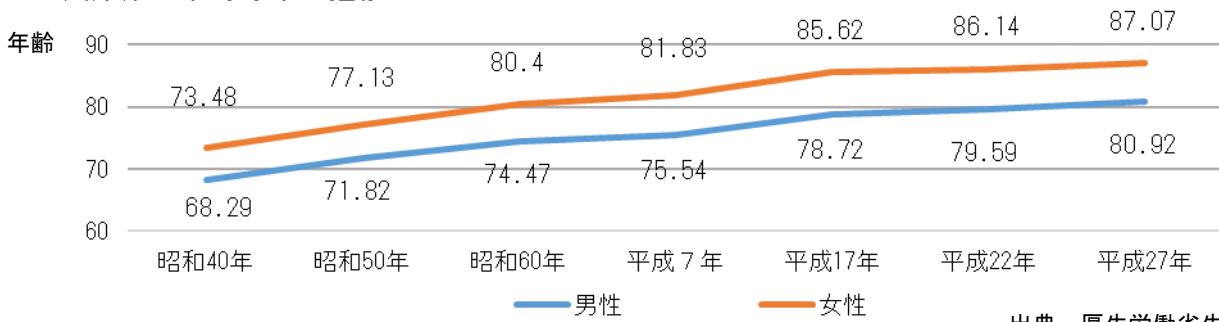
● 認知症対策やフレイル予防の取組を推進する

- ・ 地域の人から孤立することのないよう、認知症の人や家族が医療や介護の専門職に相談でき、安心して過ごせる認知症カフェの整備や活動を一層進める
- ・ 住民運営の「通いの場」づくりを一層進め、認知症の疑いのある人の早期発見に向けた取組を推進する
- ・ 認知症予防体操の普及などの認知症予防対策やフレイル予防対策を進める
- ・ イベントなどを行い、生涯スポーツの普及に努める



甲山森林公園 阪神地域の豊かな自然

兵庫県平均寿命の推移



出典：厚生労働省生命表

2030年頃の間画像

●医療と介護の連携が強化されている

- ・住民運営の「通いの場」、「サロン」等に高齢者が参加することにより、リハビリテーション職や管理栄養士、歯科衛生士などと連携し、運動・栄養、口腔の観点も含めて高齢者の状況を確認できる体制が整う
- ・必要な人へ受診勧奨を行い、受診結果の把握等を行うことで、介護サービスにつなげる取組を進める
- ・パワーアシストスーツなど、活動を支える技術開発が進み、高齢者の労働を補助する
- ・視力・聴力・記憶力を高める先端デバイスが普及し、高齢者の活動領域が狭くならないようになっている
- ・スポーツに意欲的に取り組むなど、生活の質(QOL)の向上を重要視するようになる
- ・MaaSの機能を活用したデマンド交通の実証実験や自動運転の公道走行実験など次世代モビリティ導入に向けた取組が行われている(再掲 シナリオ10)

※QOL (クオリティ・オブ・ライフ)

どれだけ人間らしい生活や自分らしい生活を送り、人生に幸福を見出しているか、ということ尺度としてとらえる概念

※MaaS (Mobility as a Service:通称マース) (再掲 シナリオ10)

交通手段をまとめてより便利な移動を実現する仕組み

2050年にめざしたい姿

●健康寿命の延伸化と自分らしい暮らしが実現している

- ・認知症に対して理解が得られるようになり、支えあっている
- ・検診体制や健康づくり活動の充実で健康が守られている
- ・ICTを活用した遠隔診断・医療が導入されている
- ・元気な高齢者が増加し、生活の質(QOL)が向上する
- ・誰もが生涯現役で趣味、スポーツ、仕事、地域活動などにいきいきと取り組んでいる



新潟スポーツの森

アートによるクリエイティブな環境づくり

- 明治時代以降、阪神地域に居を構えた大阪の裕福な商人や実業家たちが、コミュニティの形成や私学を創設した結果、著名な作家や芸術家が活動し、この地域の文化が発展しました。
- 伝統芸能は後継者を確保することが課題で、安定的な保存継承が望めます。
- 薪能などの伝統芸能からクラシックの音楽コンクール、オペラ、市民による手作りの音楽イベントや美術的なイベントなどが繰り広げられ、地域に住む人々を魅了します。

課題

● 多彩な特色あるアートイベントや舞台芸術が開催されているが、認知度が低い

- ・ 誰もが身近に芸術に親しむ機会を提供するため、多彩な特色あるアートイベント、舞台芸術が開催されている
 - 野外アートフェスティバル（西宮市）
 - アシオト（芦屋市）
 - 「鳴く虫と郷町」、伊丹朴ク（伊丹市）
 - ITAMI GREENJAM（伊丹市）
 - 宝塚音楽回廊（宝塚市）
 - 川西音楽祭（川西市）
 - ONE MUSIC CAMP（三田市）
 - のせでんアートライン（川西市）
 - Kawanishi Art Project-LIVE（川西市）
 など多数
- ・ 伝統芸能のなかには認知度が低く、保存継承が課題となるものもある
- ・ 多種多様な特色あるホールや美術館、博物館の来館者数やイベントの集客が少ない施設もあり、十分には活かされていない
- ・ 阪神地域の人々にも、文化資源やアートイベントがあまり知られていない
- ・ イベント開催時に必要な制度や手続き等が煩雑で、地域の人々が活躍できる場所が少ない

将来への取組

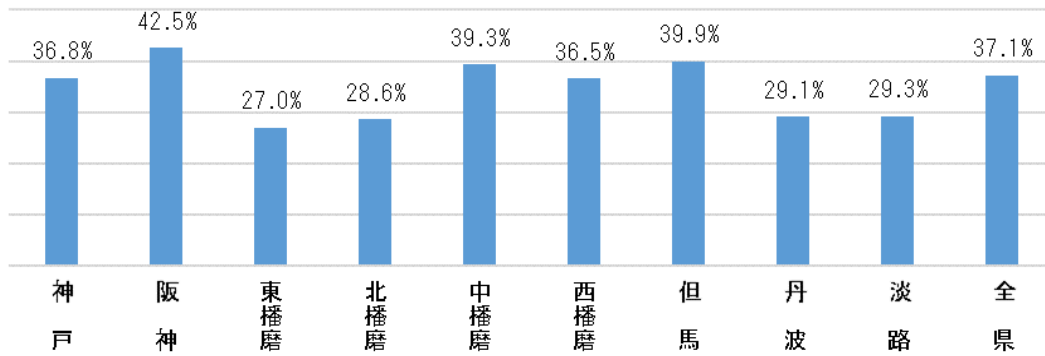
● 阪神地域のアートが知られ、アートに取り組みやすい環境づくりが広がる

- ・ 地域の芸術活動を知ってもらうため、学校、美術館、博物館などの教育・学習機関と連携し、地域の人々が「観る」だけでなく「体験」して学ぶ
- ・ 阪神地域の内外で文化資源やアートイベントが認知されるよう、アートの魅力やイベントの情報を発信する
- ・ 身近な場所でのイベントや展覧会の開催や演奏動画配信等 ICT を活用した参加しやすい活動の“場”づくりに取り組む
- ・ 地域が支援する環境を整え、気軽に多様で幅広いアートに取り組むことができる仕組みをつくる



市民が様々な形で参加するオペラ

お住まいの市・町では、芸術文化に接する機会があると思う人の割合



2030年頃の間画像

● 様々な活動が生まれ、アートがあるという理由で人が集まるようになっている

- ・美術館や博物館とも連携し、音楽、舞台芸術、美術などの様々なイベントがオープンスペースなどを活用し、日常的に催され、多くの人が参加して賑わい、交流している
- ・伝統芸能に興味を持って、新しく始める人が増え、後継者が生まれるようになっている
- ・地域間でのアートイベントの連携を強化するとともに、関係人口が生まれるようになる
- ・アーティストでなくても住民が気軽に参加できるイベントが多くあり、各地で様々な活動が生まれる
- ・「阪神地域にアートがある」という理由で人が集まるようになり、それに適したまちづくりをする

【まちづくり団体の声】

- ・イベントに参加する人が「ジブンゴト」として考え、「一緒に」楽しめるよう意識して取り組みたい。関わる人と一緒に意見を交わしながら、楽しく事業を盛り上げるように工夫している。

2050年にめざしたい姿

● アートが生み出される地になり、訪れたいくなるようなにぎわいのあるまちになる

- ・いつでも気軽にアートの活動に参加できる環境があり、地域に住む人々の生活の一部になっている
- ・阪神地域で生まれるアートの魅力でクリエイターやアートに興味がある人々が集まり、新たなアートの活動が生まれ、コミュニティが盛んになる
- ・阪神地域に集まったクリエイターが地域の人々とアートの魅力を活かしたまちづくりをしている



街を舞台にした路上ライブ

※アート

このシナリオでの「アート」とは、芸術文化だけでなく、クリエイティブな活動や営み全般のことを指す

- 阪神地域にはのんびり過ごせる自然豊かな場所や発展した街、海沿いなど多くの魅力があり、多くの人にとって訪れたい街になる魅力があります。
- しかし、阪神地域の自然、絶景スポット、伝統文化の知名度は低く、触れる機会も多くありません。
- 地域の魅力をさらに高め、地域の人が愛着を持ち、国内外から多くの人を訪れる阪神地域を目指します。

課 題

● 阪神地域の魅力を地域に住む人々が認識できていない

- ・『伊丹諸白』と『灘の生一本』などの日本遺産、多彩な公園、西宮神社（えべっさん）、阪神間モダニズムなど歴史・伝統的な資源（人、モノ、文化、自然、景観など）が多彩にあるが、認知度が低いため、ポテンシャルを発揮できていない資源が多くある

〔住んでいる地域に自慢したいスポットがある人の割合
阪神地域：51.2% 兵庫県平均：54.3%〕

- ・国内旅行の需要が高く、日本遺産や歴史・伝統資源に関する観光客の探究意欲が高いが、阪神地域の特性や地域資源をアピールできていない

【運輸関係団体の声】

- ・（阪神北地域は）日本への玄関口である関西国際空港、大阪港から大阪-京都を訪問する俗に言う“黄金ルート”から外れた印象がある。

【まちづくり団体の声】

- ・魅力の見せ方が重要。人の温かさや昔のものを大事にする「おしゃれ田舎」に魅力を感じる。

【観光関係団体の声】

- ・マイクロツーリズムでは、地域資源の磨きなおしが必要になると感じた。「日本全国から」「世界から」「国際的」などがキーワードであったが、これからは県内の人に来てもらい、地域の魅力を知ってもらうというのが必要となる。

将 来 へ の 取 組

● 住んでいる人だけでなく、関わりのある人や興味のある人に知ってもらう

- ・阪神地域に関することを積極的に情報発信することで、新たなサービスが検討され、観光の多様化を進める
- ・観光業者や行政などが阪神地域を代表する観光スポット等で積極的にイベントを開催し、地域ブランドの魅力をアピールする
- ・阪神近郊地域の住民に、周遊情報や地域の情報などを発信し、気軽に訪れやすいマイクロツーリズムを推進する
- ・甲子園や宝塚歌劇など歴史のある地域資源から新たな地域資源までそれぞれを発展させ、それらのつながりをストーリー化してアピールし、誘客する

【学生起業家の声】

- ・「宿泊してでもいきたい」という資源がない。
- ・日帰り者をターゲットに空き家や古民家を活用したいが、市街地開発の規制が厳しい

【商工団体の声】

- ・今後は、観光その他により交流人口を増加させることで、事業者の持続的発展に繋げていく取組が重要になると感じている。

※マイクロツーリズム

自宅から1～2時間圏内や近隣地域への宿泊観光や日帰り観光のこと

阪神地域主要観光地への入込客数

(単位：千人)

| 阪神南地域 | | | | 阪神北地域 | | | |
|-------|-------------|-------|--------|-------|------------|-------|--------|
| 市町名 | 観光地名 | 入込客数 | 対前年比 | 市町名 | 観光地名 | 入込客数 | 対前年比 |
| 西宮市 | 阪神甲子園球場 | 3,836 | -12.6% | 宝塚市 | 清荒神清澄寺 | 3,020 | -4.4% |
| 西宮市 | 西宮神社 | 2,283 | 5.1% | 宝塚市 | 宝塚北サービスエリア | 2,625 | -15.5% |
| 尼崎市 | 県立尼崎の森中央緑地 | 636 | 6.6% | 宝塚市 | 中山寺 | 1,274 | -1.8% |
| 西宮市 | 門戸厄神 東光寺 | 615 | 6.5% | 宝塚市 | 宝塚大劇場 | 1,140 | -10.9% |
| 西宮市 | 廣田神社 | 565 | 46.4% | 三田市 | 有馬富士公園 | 774 | 3.8% |
| 尼崎市 | 尼崎市総合文化センター | 348 | -4.5% | 宝塚市 | あいあいパーク | 692 | -3.3% |
| 尼崎市 | 尼崎城 | 211 | 711.7% | 伊丹市 | 伊丹スカイパーク | 682 | 1.2% |
| 尼崎市 | 貴布禰神社 | 185 | 5.1% | 猪名川町 | 道の駅いながわ | 628 | 3.0% |

令和元年度 兵庫県観光客動態調査

2030年頃の間想像

●阪神地域の魅力が浸透し、観光しやすい環境が整う

- ・ 阪神地域に関する知識が豊富なツアーコンダクターなど、観光に関する職業が人気になる
- ・ 阪神地域のブランド力が高まり、商品や観光地が有名になる
- ・ 県内や隣県、近隣の旅行先としてマイクロツーリズムで阪神地域を訪れる人が増える
- ・ MasSの機能を活用し、観光地をスムーズに移動できるような整備がされている



西国三十三所 大本山中山寺

2050年にめざしたい姿

●いつも誰かが訪れるにぎわいのあるまちになる

- ・ マイクロツーリズムの普及などによって交流人口が拡大し、阪神地域全体が魅力ある観光地になる
- ・ 国内外から観光の注目地になり、いつも誰かが訪れるにぎわいのあるまちになる

【観光関係団体の声】

- ・ (中国人のホテル利用者からは、尼崎はどこに行くにも便利であるという回答があったので) 狭い地域の資源だけでは人を呼び込むにも限界があることを踏まえ、周辺スポットとの近接性や、この地域の場所などを、全国的に周知することが最優先であると考えている。



現存する日本最古の酒蔵「旧岡田家住宅・酒蔵」

『「伊丹諸白」と「灘の生一本」 下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷』が日本遺産に認定(2020年)

江戸時代、伊丹、西宮・灘の酒造家たちは、優れた技術、良質な米と水、酒輸送専用の樽廻船によって、「下り酒」と称賛された上質の酒を江戸へ届け、清酒のスタンダードを築きました。酒造家たちの技術革新への情熱は、伝統ある酒蔵としての矜持と進取の気風を生み、「阪神間」の文化を育みました。六甲山の風土と人に恵まれたこの地では、水を守り、米を育てる人々、祭りに集う人々、酒の香漂う酒造地帯を訪れ、蔵開きを楽しむ人々が共にあり、400年の伝統と革新の清酒が造られています。

- 阪神地域の多様な「農」や食に関わる活動拠点をアトラクションと位置づけ、地域全体をテーマパークと見立て、農業者、食関連等事業者、消費者が連携して都市・都市近郊農業の振興や地域資源の保全・活用を図り、阪神地域の魅力アップを目指す「阪神アグリパーク構想」を推進しています。
- 清酒発祥の地として盛んに営まれてきた日本酒のほか、歴史のある多彩な「メイド・イン・阪神」の食材がブランドとして確立し、地域がにぎわうことを目指します。

課 題

● 阪神地域こだわりの食材やブランドを維持する継承者が不足している

- ・ 働き方改革や定年延長により、農業継承するために、Uターンする人が減少している
- ・ 担い手の高齢化が進み、加えて次世代の担い手も減少する中、耕作放棄地が増加している
- ・ 生産数量が少ない品目や地域外流通もあることから、阪神地域の特産物の生産量や認知度が低く、地産地消の意識が醸成されにくい
- ・ 阪神地域の特産物を使った食育の機会が十分でない

【みんなの声】

- ・ 輸送技術の進化により、品質や鮮度の良い状態で地域外の農産物が量販店に並ぶ。阪神地域で作られた農産物が、既存の流通経路により、地域外へ出荷されることがあるため、地元農産物の認知度が低いように思う。

【農業団体の声】

- ・ 西宮や阪神南部地域では洋菓子などのブランド店も多く、全国区になっている。



トマト



たみまるレモン

将 来 へ の 取 組

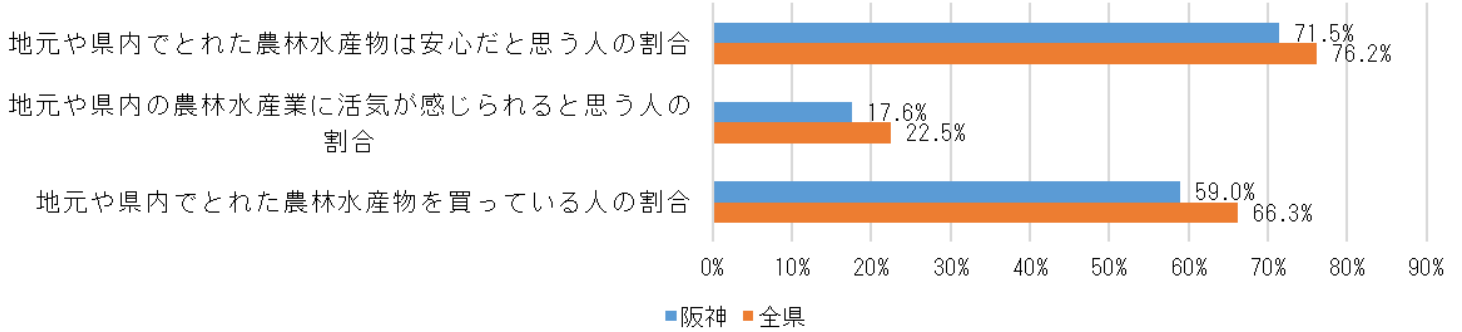
● 就農希望者と農地を円滑に組み合わせる仕組み、ブランドが維持できる仕組みをつくる

- ・ 後継者の確保のため、農地情報など就農や規模拡大に必要な情報をより入手しやすい環境を整備する
- ・ ロボット技術やICTを活用し、省力で高品質な農作物を安定生産するスマート農業の導入を進める
- ・ 障害者等の自信や生きがいが創出され、多様な担い手で農が支えられるよう、農福連携の取組を進める
- ・ 阪神産農作物を購入して味わう場所が増え、地元農産物等を使った旬の料理の提案や紹介ができるイベントを充実させる
- ・ 教育・学習機関と「農」と食に携わる人が連携し、講習やイベントを行うことで阪神地域の人の「農」と食に関する知識が増え、意識も向上する

【みんなの声】

- ・ 「阪神産食材の日」を設定し、学校給食やそれぞれの飲食店で献立を考えて提供すると、意識が高まり地域が元気になると思う。

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

● 阪神産食材の人気が高まり、就農希望者や後継者が増える

- ・「農地の賃借、売買」をサポートする仕組み（農地バンク）の活用が広がり、新規就農者や規模拡大を目指す農業者と農地の迅速なマッチングが進んでいる
- ・阪神地域の魅力的な食のスポットや、特産物の情報を簡単に得ることができ、食を通じた阪神産農産物の消費が拡大する
- ・スマート農業技術を活用した安定生産により、学校給食や多くの店で阪神地域の食材を積極的に活用することができる
- ・「農」と食に関する教育や学習機会が増え、生産者と消費者が交流する場が拡大している

【生産者の声】

- ・地産地消で消費者に生産したものがすぐ届くというのが強み。休耕地や畑があるので、若い人達に農業に触れてもらい若手就農者をいかに増やすかということが課題である。

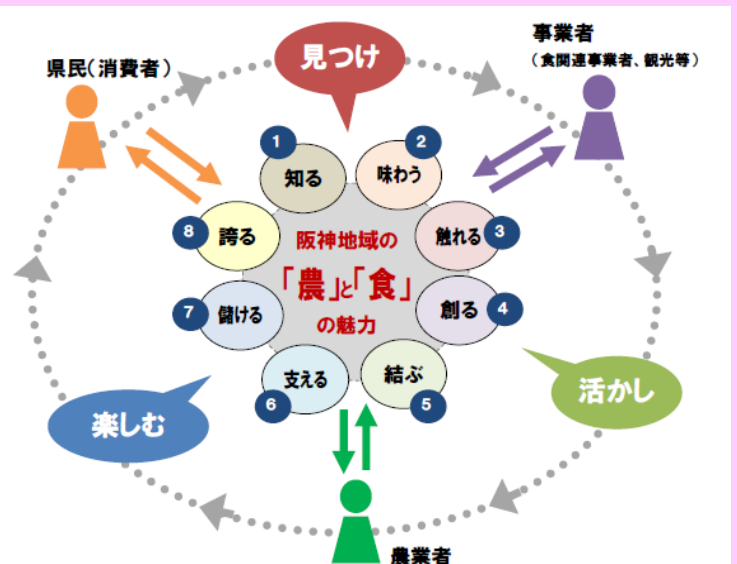
【農業団体の声】

- ・農業を法人化して生育状況の把握や農機の管理をすることで農家の負担を減らし、他業種からの就農者や転作（米作りから野菜作り等）する人が持続可能になればいい。

2050年にめざしたい姿

● 「メイド・イン・阪神」の食材がブランドとして確立し、人気が高まる

- ・農業に興味を持ち、阪神地域で「農業をやってみよう」と思う意欲的な人が参入し、農村定住人口が増加する
- ・「美味しい食のまち、阪神」として、他地域からの観光客が増え、阪神地域の各地で阪神産食材を使った料理を味わうことができる
- ・「農」や食についての教育・学習機会が身近にあり、意欲有る人が円滑に就農でき、阪神産農産物を用いる多様な食関連産業が確立されている



阪神アグリパークの目指す姿

まちなかのにぎわいを創出する

- 阪神地域には、地域資源に恵まれた魅力ある場所が多くあります。寺院が軒を連ねる寺町、城下町の面影があるエリア、日本有数の酒造の町として歴史と文化に培われた見どころのあるエリアなどがあります。また、都市近郊の豊かな自然に恵まれた地域でも、随所で貴重な史跡や文化財と出会うことができます。
- 伝統的な祭りも各地にあり、身近な神社、仏閣などの地域資源を活かしたイベントなどを通してまちなかににぎわいを創り出すことを目指します。

課題

● まちなかのオープンスペースや情報などが有効活用されていない

- ・ 商店街でも空き地、空き店舗が増え、まちの活力が損なわれている
- ・ 地元の祭りの担い手の減少により、祭りを継続させることが難しい
- ・ 西宮神社、門戸厄神東光寺、廣田神社、清荒神清澄寺、中山寺は観光客が多く訪れるが、まだ知られていない神社仏閣がある
- ・ 薪能、十日戎、尼崎市民まつり、えべっさん、西宮酒蔵ルネッサンス、西宮神社福男えらび、芦屋市民ギャラリーや宮前まつり、川西市源氏祭り、さんだ農業まつり、いながわまつりなどがあり、にぎわっている
- ・ 阪神地域の地域資源について知られていない

【芸術団体の声】

- ・ 川西市にある歴史・文化的価値のある資源（多田神社、満願寺、石切山等）数多くあるが、より身近に感じられるように活用の仕方を工夫する必要がある。
- ・ 源氏祭りをはじめとした川西市内のイベントや歴史・文化資源を単独で考えるのではなくつなぎ合わせることで、さらなる付加価値をつけ魅力を高める。

将来への取組

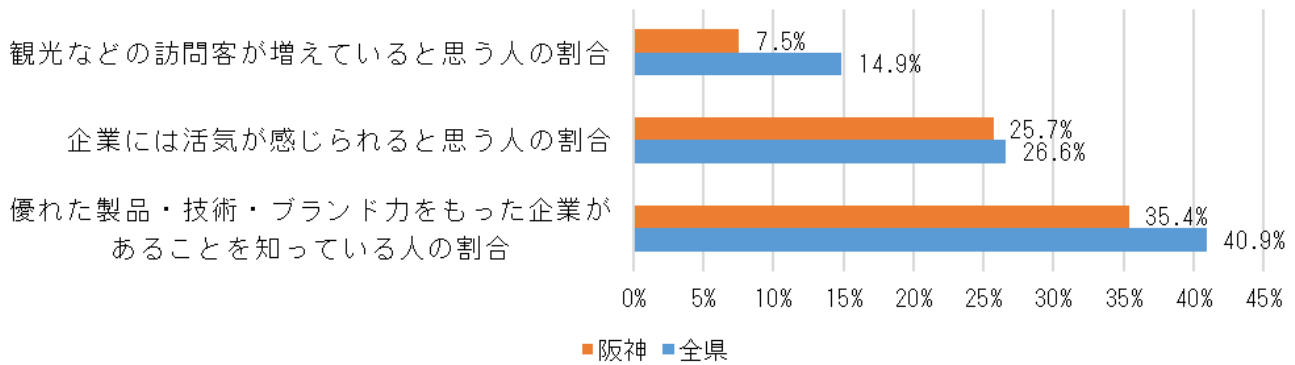
● 地域のコミュニティやイベントに参加しやすい環境を整える

- ・ 空き店舗やオープンスペースなどを試験的に活用し、にぎわいやまち歩きを創出するきっかけづくりに取り組む
- ・ コミュニティや地域への転入者も地元の祭りに携われるようルールやしきたりを変更する
- ・ 地域住民が、地域の伝統と文化について体験をすることで学び、「参加する人」、「支える人」、「楽しむ人」の人口を増やす
- ・ イベントなどの情報が日にちや場所で簡単に調べることができるなど、わかりやすく、見つけやすくすることで、イベントに参加する人を増やす
- ・ 阪神地域の産業も地域資源であり、教育・学習機関と連携し、多くの人々に産業分野を知ってもらう

【芸術団体の声】

- ・ 世代別のニーズに合ったイベントの開催、おしゃれなマルシェや朝市、夜市などを開催し、川西市内商店街の活性化を積極的に進める。
- ・ 市町村間と様々なイベントをコラボして、歴史文化の展示等についても繋がりある市町村間と連携し歴史の理解を深める。

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

●にぎわいがうまれる環境ができ、意欲ある活用で発展する

- ・空地・空き家のリノベーションをしたり、再整備で活用した交流の拠点が生まれ、にぎわっている
- ・地域の専門家がファシリテーターとなり、地域の活動やにぎわいを支える
- ・参加したい人すべてが集える祭りやイベントが形成され、まちに活気がある
- ・地域に関わる人や新たに参加する人が気軽にイベントの立ち上げなどに参加でき、複業としても観光業につながり、成り立っている
- ・阪神地域の工場見学、産業発祥の地などを観光資源とした産業観光が拡大する

【NPO 法人の声】

- ・「自助・共助・公助」があるが、「共助」の弾力性が強い地域が生き残る。今までボランティアで支えてきたとすれば、今後はビジネス的な方法、持続可能性のある手法で共助の形を作っていくことが大切である。



地域住民によるイベント

2050年にめざしたい姿

●地域資源が継承され、交流やイベントも行われるなど、地域がにぎわっている

- ・空き店舗やオープンスペースをアプリ予約などで気軽に活用できる仕組みができる
- ・地域資源が柔軟に活用され、いつでも人が集まる、楽しむしかけが広がっている
- ・多くの人が祭りやイベントに集い、地域でコミュニティが生まれ交流している
- ・阪神地域の環境や文化を認知・理解し、時代にあった様々な働きかけを行いながら文化を築き上げ、世代を超えて積み重ねた様々な地域資源が継承される

【イベント団体の声】

- ・イベントは、表現と活躍のプラットフォーム。場所と資金と集客はイベント団体が行き、あとは任せる。場所と市民・団体をマッチングする。



地域住民によるイベント

- 阪神地域には複合スポーツ施設「尼崎スポーツの森」、芦屋浜にビーチバレーコート、西宮にヨットハーバーなどの施設があり、子ども向けのスポーツ教室も開催されるなど、スポーツに親しむ機会、場所は多くあります。
- 甲子園球場の高校野球やプロ野球の観戦者数は年間およそ 400 万人を数え、アメリカンフットボールの「甲子園ボウル」も開催され観戦するスポーツも熱を帯びています。
- 多様なスポーツを体験したり、観戦したりすることが盛んになり、スポーツが生活の一部となることを目指します。

課 題

将 来 へ の 取 組

●スポーツを楽しむコミュニティや環境が整っていない

- ・ 甲子園球場は、高校野球の聖地として、プロ野球チームのホームグラウンドとして、多くのファンを集めている。また、プロバスケットボールチームや関西独立リーグに所属するプロ野球チームがあるが、全国的に兵庫県にあることが十分に認知されていない
- ・ 体力や年齢に応じたスポーツを始める機会や対応したコミュニティが少ない
- ・ スポーツを「する」だけでなく、「観る」「支える」を含めた、スポーツへの関わり方やマインースポーツの認知の拡大が必要である
- ・ 山や海でのスポーツなど、アウトドアスポーツ活動への関心が高まっているが環境が整っていない



モルック（尼崎 21 世紀の森中央緑地）

●スポーツへの関心が深まり、多様なスポーツを楽しむ

- ・ スポーツ施設を PR し、近隣の様々な施設等との連携を強化するなど、阪神地域へのスポーツツーリズムを推進する体制を構築する
- ・ スポーツ教室の開催など、身近な場でスポーツを体験する機会を増やし、地域住民のスポーツへの意識向上に取り組む
- ・ ダーツ、ビリヤード、競技かるた、e スポーツなど競技人口が少ないスポーツは、教室を開催し、普及やイメージアップに取り組み、競技人口を増やす
- ・ 学校や企業と連携し、人材交流や施設開放、様々なスポーツの種類や関わり方の認知向上、体験会の開催などを進める
- ・ 密を回避した自然を体感する北摂での里山スポーツや芦屋浜でのマリンスポーツの活動が増え、認知されるようになり、盛んになる

【サイクリングチームの声】

- ・ 県内では播磨中央公園にサイクルステーションができるようだが、1 か所では意味がない。県民局エリア毎に 1 か所は整備が必要。
- ・ 自転車を通勤に使う人が増加したが、活用できるサイクルロードが少ない。



阪神甲子園球場（西宮市）

【芦屋ロックガーデン】

六甲山系を上る無数のルートの中でも、奇岩群を超えながら上るロックガーデンは1年を通して多くの登山客でにぎわう人気のルートです。

朝日新聞の新聞記者をしながら、登山家として活動した藤木九三氏が住宅地から近いこの場所でロッククライミングを始めたことから、日本におけるロッククライミング発祥の地として知られています。

2030年頃の間画像

●スポーツツーリズムの活性化とスポーツに関わる機会の増加

- ・ 阪神地域のスポーツツーリズムが人気を呼び、試合等イベント後の継続的・発展的な効果を見据える
- ・ 多種多様なスポーツの競技人口が増え、気軽にスポーツに取り組む機会や場所ができる
- ・ 阪神地域がスポーツに関する知識の集積地となり、スポーツを支える人が増える
- ・ サイクルスポーツやトレイルランが里山スポーツで人気になる

【スポーツ団体の声】

- ・ スポーツと文化の融合領域があって地域が元気になる。ダンス、スケートボード、BMXなど、騒音の問題もあるが伸ばしていきたい。



車椅子バスケットボール

2050年にめざしたい姿

●スポーツが地域を支え、阪神間でスポーツが生活の一部になる

- ・ スポーツをする人や支える人が集い、スポーツのまちとして新たな産業がうまれている
- ・ 地域住民が日常的にスポーツを行える場として、誰もが、いつでも、どこでもスポーツに親しむことができるようになる
- ・ 阪神地域の自然を活かしたスポーツが、地域に住む人の生活や文化の一部となり、様々な年代に親しまれる



尼崎北堀運河博覧会によるイベント

※スポーツツーリズム

スポーツの観戦や参加を目的として、スポーツに関わるためにその地域を訪れる観光のこと

第5章 地域ビジョンの実現に向けて

新地域ビジョンは、阪神地域の住民、企業、教育機関、団体やNPO法人、行政が阪神地域の可能性や地域の資源を共有し、実現に向けて取り組むものです。

多様な主体がそれぞれの方法で新地域ビジョンの実現に向けて進みましょう。

(1) 阪神地域の住民

「きっかけ」と「場」での出会いがキーワードです。

住民一人ひとりのきっかけをもとに、地域社会やまちの将来に関心を持ち、自分に合ったコミュニティを見つけ、地域活動へ参加してみましょう。地域の課題や目標を認識・共有し、新地域ビジョンの実現に向けて行動してみましょう。

さらに阪神地域へ新たに関わる人、関わりたい人もともに歩いていく仲間だという意識を持つことで、“場”で人々が出会い、新たな発想が加わり、既存のコミュニティや地域活動を発展させることができます。

また阪神地域に新たに関わる人同士が出会い、今までにないコミュニティが生まれると、そこからでも新たな活動の輪が広がります。

さまざまな人々がそれぞれを認め合い、それぞれの人が自分のできることに取り組み、重層的につながることで、コ・クリエーションが育まれます。

(2) 企業

在宅ワーク環境や働く人々の生活スタイルに合わせた柔軟な勤務条件の整備や、環境保全のための脱炭素社会の実現へ取り組みます。また、企業が地域活動に関わり、企業の専門とする知識やノウハウを提供する機会を通じて、地域住民と交流し、相互に理解することや、社員の地域活動を理解し、その活動に企画から参画するなど、連携と協働で取組を進めることが肝要です。

(3) 教育機関

美術館、博物館、図書館、公民館等は、地域と一緒にワークショップなどを開催し、社会人や子どもが学び合い、つながる機会を増やしていくことが重要です。

大学等の高等教育機関は、高度な専門的知識を習得する機会の提供や、学術的支援、人材養成支援を行います。また、教員や学生が取り組むフィールドワークなど、大学の教育、研究活動において、学生特有の視点を発揮し、地域の活性化に向けた実践活動を展開していきます。

(4) 団体、NPO法人

専門分野の活動を基本に、地域づくりのニーズを掘り起こし、人材や資源を発掘・活用することにより、社会的課題の解決や、住民が行う地域活動を支援します。

また、人と人が出会うきっかけづくりや場づくりを行い、組織と組織をつなぐコーディネート機能を向上させ、地域社会づくりへ主体的に参画することで、自主的、自発的に地域活動を行う新たな実践者を増やす役割を担います。

(5) 行政

様々な主体と連携して、必要とする情報や交流機会を提供するプラットフォーム機能を向上させ、住民・地域団体が行う活動への助言を行うなど参画と協働を支援するとともに、人材育成や地域づくりに取り組みます。

また、県が行う施策については、新地域ビジョンの実行プログラムを策定し、推進することとします。

